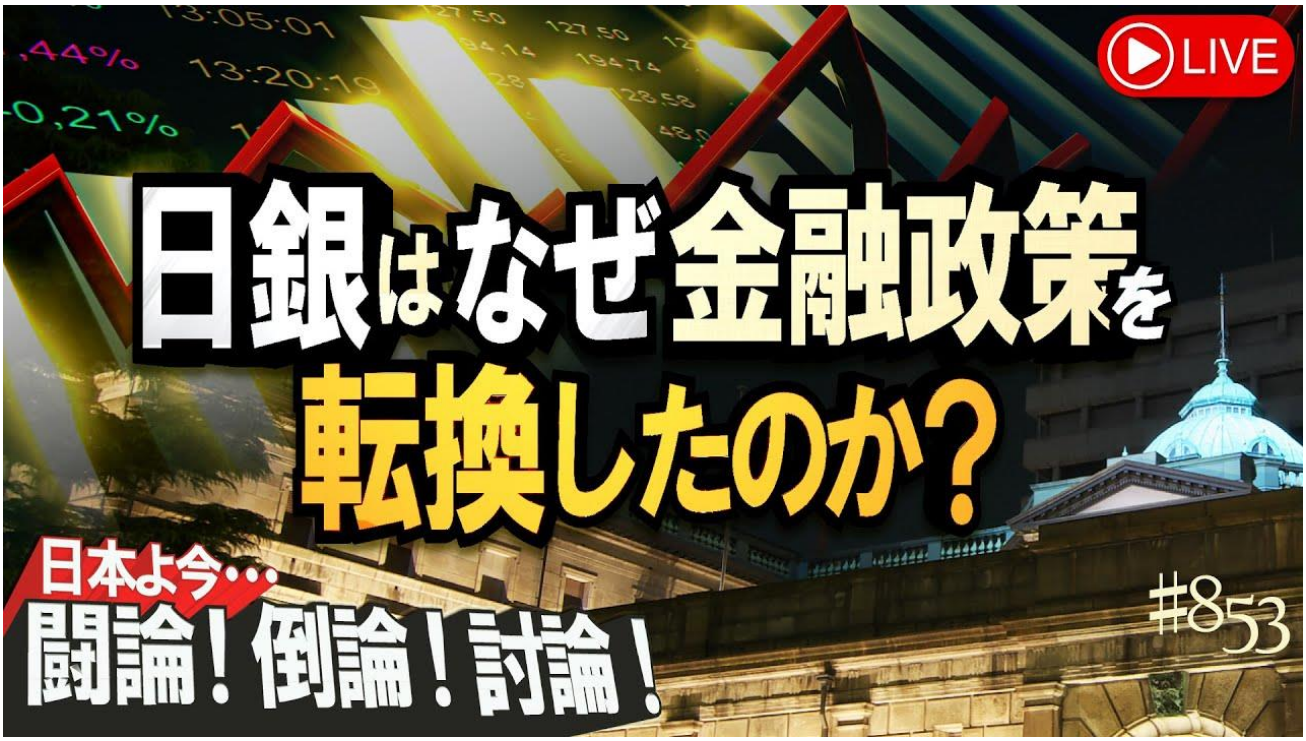

日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５３回

日銀はなぜ金融政策を転換したのか？

R6/4/16

パネリスト：

　あんどう裕（前衆議院議員）

　田中秀臣（上武大学教授）

　田村秀男（産経新聞特別記者・編集委員兼論説委員）

　室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

　森永卓郎（経済アナリスト・獨協大学教授）

司会：水島総

＊＊＊＊＊＊

水島「皆さん、こんばんは」

一同「（礼）」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２４第８５３回目の討論となります。今日は、経済を中心に、皆さんと日本の経済、世界の経済について、じっくりと話し合ってみたいと思います。そういう中で、今、日銀が金融政策を転換したと言われていますが、つい昨日、今日、円安が１５４円台に突入したというようなことや様々な動きが出ております。私達の経済、そして、もう一つ、政治の部分で言えば、日米関係の問題、訪米がありました。その中で円安が進む、そしてイランとイスラエルのミサイルのやり取りというものが起きております。

刻々と言い方が変わっているんですけども、我々がここで言っておかなきゃいけないのは、これは事実なので皆さんに言っておきますと、９９％迎撃したというのは、その通りであります。ただ、これはイギリスもアメリカもイスラエルも加わったアイアンドームという形の鉄壁の迎撃システムというのが作動したと言っていますが、９９％の内の１％がイスラエルの空軍基地に着弾している。そしてイランは極超音速ミサイルは使っていないんだというようなことで、色々軍事関係の人に聞きますと、これは大変なことで、実はイスラエルのアイアン・システムは効いていないんだと。いくら頑張ってもイスラエルは、もう安全ではない。

今、テルアビブ空港のことも報道されていませんけど、空港に出国の人達が殺到しているというようなことも外国では伝えられております。今日、お出で戴きました森永さんが、メディアは本当のことを何も伝えてない、逆にタブーとか、そういう中に経済もある。

そして、この間『書いてはいけない』という本もお書きになって出版されていらっしゃいます。こういうタブーを超えて、本当の日本の経済の状態、日本の状態を、私達は伝えていきたいと思います。そういう意味で、是非、今日は忌憚の無い本当のことを、遠慮なく、どんどん伝えて議論してみたいと思います。早速、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、産経新聞特別記者、編集委員兼論説委員の田村秀男さんです。宜しくお願いします」

田村「あ、宜しく」

水島「経済アナリスト、獨協大学教授の森永卓郎さんです。宜しくお願いします」

森永「あ、宜しくお願いします。すみません、こんな格好で」

水島「いえいえ。もう、皆さん、ご存じのように森永さんは今、闘病中というか、本当に色々な形で病気と闘っておられます。そこをお願いしてご出演戴いているので前半９０分ぐらいということで、ご退席して戴くということです」

森永「（頷く）」

水島「本当にお身体を大事にして戴きたいし、頼りにしていますので」

森永「有難うございます」

水島「是非、今日も、この間、ご出演戴いたようにズバズバ色んなことを言って戴ければと思います」

森永「はい」

水島「宜しくお願いします」

森永「宜しくお願いします」

水島「そして上武大学教授の田中秀臣さんです。宜しくお願いします」

田中「宜しくお願いします」

水島「前衆議院議員のあんどう裕さんです。宜しくお願いします」

あんどう「はい。宜しくお願いします」

水島「そして室伏政策研究室代表の政策コンサルタント、室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「今日は、このメンバーでじっくりと話し合ってみたいと思います。今、こういう状態ですけど、生々しいと言うか具体的な話ですけど、円安が進んでいて日銀が為替介入するとか色んな事が言われています。今の日本の経済をどんなふうに見ているか簡単に、それぞれの見方をお話し戴ければと思います。まず、田村さんから一言」

田村「まぁ、この円安ですけどね、日銀の植田和男総裁は国会や他の所でも言っているんですけど、要するに為替が動くんじゃあ、やはり経済や物価情勢に影響があるんでね、それで、その金融、まぁ、要するに利上げを考えるという風な意味の事を盛んに言っとる訳ですよ」

水島「うん」

田村「それを聞いてねぇ、私は、あぁ、この人、何も解っていないなぁと」

水島「うん」

田村「これは、彼が利上げを示唆するだけで余計に円安になるんですよね」

水島「うん、うん」

田村「というのはね、それだけ日本の円というのは、もう投機の対象としてビルトインされちゃっていて、要するにドルを中心とする世界の金融の通貨、もう日本の円を投機して売って儲かるという中に全部、嵌り込んじゃっているんですね」

水島「そういう構造の中にね」

田村「ここから抜けだそうと思ったら、金利１０％ぐらい上げるしかないですよね、（失笑）。だから植田さんは、どうせ小幅な利上げでとかいうことを言って、だったら投機筋はもっと利上げするだろうっていうんで余計、投機に走るんですね」

水島「うん、うん」

田村「だから、この人は、なんて馬鹿なことを言うんだろうと思ったんだけどね」

水島「うん」

田村「まぁ、いずれにしても、何故、こんなに円安になるかっていうのは、日本が、ずっと３０年デフレが続いてね、それで財政をどんどん引き締めてね、増税はやるわね、そういうデフレを温存させる政策ばかり執って来た」

水島「うん」

田村「それが故に、どんどん円は、ウォール街とか、ああいう所に、もう完全な投機の商品と化してしまったんですね。これで、もう世界のシステムが決まっちゃっている感じがありましてね。私は、これが容易な事じゃないなぁと非常に思うんですけれども、唯一出来るのは、やはり日本が最近の岸田さんの訪米みたいにね、要するにアメリカに絶えず頭を下げて遜るんじゃなくて、これは、もう日本なんだと。だからね、我々として日本の為にあるジャパン・ファーストの政策を必ず執るんだという風な基本的な姿勢が出て来ることが、僕は、一番、大事なことだと思うんですね。もう、これ以上は日本が売られるだけですね」

水島「そうですねぇ。そういう意味では株が上がる何だって言っても、為替の問題を考えればね。それから、もう一つ政策的に、あとで指摘があればと思うんですけど、とにかく日本の１９００兆円と言われる預貯金を、所謂、株だ何だ、ＮＩＳＡだ何だって、とにかく株を買え、株を買えってインターネット上、地上波も、どんどんやって金を使わせようとしていると。本当に、これ、大丈夫か、大丈夫じゃないと思っているんですけども（苦笑）、もう色んな意味で何か危うい雰囲気が漂い始めているんですけど、森永さん、今のはいかがですか」

森永「う～ん、まず円安の事から申し上げると、マーケットを注視すると言いながら一切、介入に出ていないんですね」

水島「はい、そうですね」

森永「多分、何故、介入しないかって言うと、目的は二つあって、植田総裁が次なる利上げの口実をつくりたいというのが一つと」

水島「なるほど」

森永「もう一つは、実は日本が持っている外貨」

水島「はい」

森永「外貨準備と日銀が持っている部分と年金積立金が持っている分で３００兆円ちょっとあるんです」

水島「はい」

森永「この内、ざっくり計算すると、現在の為替レートだと１００兆円を遥かに上回る為替差益が出ているんですね」

水島「あぁ～」

森永「もし、ここで売ったりすると、その埋蔵金が一気に表面化する。１００兆っていうのは物凄いお金ですから」

水島「それは、そうですよねぇ」

森永「えぇ。例えば三分の一売っただけで、消費税１年間、ゼロに出来ちゃう。財務省としては、どうしても増税増負担路線は続けたいので、財政に余裕があるんだ、埋蔵金があるんだっていうのがバレちゃうと、とても都合が悪いので、それを表に出したくないっていう、この二つの理由で何も行動しないっていうのが円安の原因だと、私は見ています」

水島「そうですね。なるほどねぇ。はい。いやいや聞くと、中々とんでもない話なんですけ

ども、そうですね。田中さん、お願いします」

田中「えーと、まぁ、お二人の言ったことと殆ど変わらないんですけど、植田総裁って民間に居た時に、僕は自分と主張と違う人のテキストを授業で使うのが大好きなので、実は彼が民間時代に書いていた金融政策のテキストを使っていたんですよね。そこに書いてあるのは、マイナス金利をやっているとインフレがコントロール出来なくなるって明言して書いているんですよ」

水島「あぁ～…」

田中「でも、はっきり言って、ずぅ～っとデフレ体質の時に、そのテキストを書いていて、インフレに全然出来なくて困っているのに、何故、この人はこんなことを書くのかなぁと思って、赤いボーダーラインを何年か前に引いていたんですよね」

水島「うん」

田中「彼が日銀総裁になるっていうことになって、まぁ、やれやれと言って、誰がそういう知恵を入れたのかなと」

水島「うん」

田中「最も言っている事とやろうとしている事が、ちぐはぐになって、ぶっちゃけて、一番、嫌な奴がなるなぁと思ったんですよ」

水島「うん」

田中「案の定、今、やっていることは事実上の利上げですよね」

水島「うん」

田中「今は、そんな微々たる金利を上げるスタンスですけれども、これを市場に対して発するメッセージとしては最悪の事をやっていますよねぇ。これは田村さんや森永さんが言っているのと同じように、事実上、財務省とタッグを組んで、これから日本経済は緊縮方向にしか振れませんよと。何故ならば、もう財務省は大盤振る舞いみたいな財政政策はやりませんと。財政正常化」

水島「うん」

田中「ね。日銀の方は、金利のある世界を金利の正常化で結びますと。お前らの頭の方が正常化していないのに、というね。それが、もう日本の大停滞の問題なのに、それを、また繰り返していると。しかも最悪なのはリーク問題ですよね」

水島「うん」

田中「今、日銀っていうのは政策手段が二つあるんですよ。金融緩和をやめる政策手段と、もう一個は口先で、マスコミの人に自分達の政策って、こういう風に動きますよと、事前に餌をばら撒くんですよね。本当は今回の金融政策の転換を、恐らく１月にやろうと思ったんですよね」

水島「あぁ」

田中「今迄の７月と１１月のパターンを見ると、大体、前の時に日経とかブルームバーグと

かにリークしているんですよ。大体、それを前日ぐらいに報道して、みんなが、あぁ、また、リークが来たって言ってやる訳ですよね。ところが１月にやらなかったじゃないですか。だけど、もう１月の仕込みをやっていたんですよ」

水島「なるほど」

田中「えぇ。仕込みは、もう１月の時にやっちゃっていたんで、でも、あの地震のせいで、実際、出来なかったですよね」

水島「あぁ、そういうことですね」

田中「でもマスコミには情報を渡しちゃったものだから、さぁ、大変ですよ。もう止められないですから。この３月の政策転換の前は、色んなマスコミが具体的にどんな政策でやるかということが色んな方向からフルセットで出てきましたよね。止められなかった訳ですよ。

結局、そういったパターンを繰り返している訳で、全く先進国の金融政策の在り方じゃないと。原始人間ギャートルズ並みの金融政策をやっているという風に、私は思いますね」

水島「全くそうですね」

田中「だから、全く日本型エリートの腐敗を日銀を通して、特に植田さんを通して見せつけられていると」

水島「なるほど」

田中「あと、言いたい事が一個あって、はっきり言ってリフレ派も駄目ですね」

水島「そう」

田中「特にリフレ派の弱点は、人が良過ぎる。現実認識が甘い。あとは人を性善説でとってしまって、何かエリート主義です」

水島「うん」

田中「だから植田さんが大学の先生で初めて日銀総裁になるっていうことを、申し訳ないけど、リフレ派の一部は学者だから素晴らしいとか、東大だから素晴らしいみたいなことを言っていた人も居るんですよ」

水島「うん」

田中「それって、ただの権威主義的なもので、日本のエリート社会の最もやっちゃいけない評価の仕方ですよね。それでもって、ＹＣＣって去年、修正した時に、僕なんか批判したんですよ。その時のリフレ派を批判したのは、まぁ、森永さんもしたかもしれませんが、大体、３人か４人で極少数派ですよ。あとは、別に金融引き締めではないと。違うと。これは金融引き締めの前段階で、これから、どんどん加速するに決まっていると。

それでリークという手法を使って市場をたぶらかしてやるんだと。やがて行き着く先は、財務省と組んだ全面的な緊縮路線であるという風なことを１年前に言った時、誰も味方に居ないですから。岩田先生だって違いますし、浜田先生だって違うというようなことを言っていましたけど、今は掌返して、まぁ、岩田先生達には悪いですけど、事実上、そういった早過ぎる政策転換をしたとかって言っているんですが、早過ぎる政策転換は去年のＹＣＣの修正

の時にやっているんで、そこを見なきゃいけないですよ。だから悪人ですよ。腐ったエリートで悪人。それが植田日銀の体制であって、それを打破しなきゃいけない訳ですよ。本当に日本社会は腐りますよ。以上」

水島「そうだねぇ。はい、どうも有難うございます。実に明解でした。では、あんどうさん、お願いします」

あんどう「はい。今、お三方がおっしゃったことと殆ど一緒ですけれども、やはり植田さんという方は、元々の黒田路線を変えるという役割で任命された人だと思うんですね。それで、今回も大幅な金融政策の転換をしたということですけれども、これまで黒田日銀の時は日本の政府機関の中で唯一、真面な経済判断をしていたのが日銀だったと思うんですよ。

日銀があったお陰で、日本経済は何とか踏みとどまっていた。財務省に対抗するような形が取れていたと思うんですけど、これが完全にひっくり返されると。それで財務省のこれからの緊縮路線、そして消費税増税を睨んでいると思いますけれども、その為の下地を今、作っていると。

植田さんが総裁に就任する時から、もう政策転換はいつなんだっていうことが、その時から言われていましたよね」

水島「はい、そうでしたね」

あんどう「それで、もう、いつ、やるんだっていうのが、ほぼ既定路線みたいになっていて、それで実際に行う前には、今、田中さんもおっしゃいましたけれども、物凄いリークが出て、あぁ、もう、やるんだなということが完全に周知徹底されて、転換が行われることになっています。これから、ほぼ財務省路線で政策が進められていくんだろうなと。

そして、今迄、それに抵抗していた日銀もそれに協力する側に回ったんだなっていうことで、本当に日本経済は、これから大変な状況になってくるなぁっていうのが、今、解っている人は解っているんじゃないかなっていう風に思いますね。はい」

水島「なるほど。はい。室伏さん、お願いします」

室伏「はい。今、ちょっと先にいっちゃいます。前もね、FrontJapan 桜でも使いましたけど、結局、今回の金融政策の枠組みの見直しということでやったのは、こういう流れじゃないですか。でも、皆さん、一致してお話し戴いている通り、事実上の利上げですと。ということは何ですかと言ったら、アベノミクスの異次元の金融緩和は終了ですけど、要は、まず、これを終わらせたかったと。

とにかく、これが嫌で嫌でしょうがない財務省と、それから結局、日銀も、黒田さんになる前って白川さんで、あの方々って結局、金融引き締め派だったじゃないですか。何とか抵抗したんだけども折れて、最終的に任期の手前で白川さんが辞めて、黒田さんが残りの任期と、それから、また新しくっていうので、丁度、私が秘書をやっていたので、関わっていましたから、どういう人事なのかとかよく覚えていますけど、そういう形でやった。

それが、とにかく嫌だったっていうことで、要はここの部分ですね。とにかく、これをやめる為に、ずぅっと準備をしてきたと。先程、１月っておっしゃったんですが、実は１２月の金融政策決定会合でやろうとしていたそうです。その前に御子息の森永康平さんが、お漏らし、お漏らしっていう風に言っていましたけど、そういう形で、金融関係者とかに利上げを

決めたからということを言っていたそうですけど、１２月に、新藤大臣が金融政策決定会合に出席をした際、要はそれを抑えたということで、また先送りになったと。

ところが、その１月に、これは、とんでもないことですけど、天皇陛下は普段だと一般参賀があるんですけども、能登地震があったので、お言葉ということで発表されたんですけど、その中で『物価に苦しむ国民を』と心配されるお言葉があったと。それを日銀の連中は悪用して、陛下も心配されているんだから、それを抑える為には利上げをしなきゃいけないと。

金融政策が悪いんだ。まぁ、金融政策は悪い訳じゃないんですけども、更に、お漏らしをし始めて、金融関係者との会合でも決めたからということで、取り込み済みの話を言って、最終的には、植田さんっていう方は、かなり風見鶏だそうですね。要するに自分に軸があって決めるということをやらないので、金融政策決定会合で、どうするかと言ったら、もう、総裁、もう金融関係者は、みんな利上げを織り込んで動いていますから、今更マイナス金利を解除しないという選択肢はありません、もう、これしかありませんということで、それで、まぁ、こういう風な決定をさせたということだそうです。まぁ、とんでもない話ですよね」

水島「うん」

室伏「結局、先程から日銀の動きと財務省の話がありましたけど、結局、それって大規模な金融緩和があるからこそ機動的な財政政策が出来ると。だから、大規模な金融緩和を止めちゃうと、機動的な財政政策が出来なくなると。だからこそ大規模な金融緩和を止めるのが日銀。そして、これでやっと、機動的な財政政策を止めるのが財務省と、この連係プレイが成立するということですよね。

結局、彼らは何を考えているのかって言ったら、先程、申し上げたように、日銀は金融引き締めをしたいと。アベノミクスの金融緩和を止めたいというだけ。財務省は、とにかく緊縮をやりたいというだけと。じゃあ、そこに日本の国民経済が今、どうなっているのかっていうことを全然、考えていない訳ですよね。物価が上がりましたと。コストプッシュ・インフレですという風なことを言っても、インフレ率２％、超えているじゃないかということを言うと。

要はインフレ、デフレの話をする時に、確かに定義としては物価が継続的に上がって行くという話ですけど、別の言い方をすると需要と供給の関係の話であって、じゃあ、需要はどうなっていますかって言うと、家計調査の結果から明らかなように、ずぅ～っと収縮している訳ですね」

水島「うん」

室伏「しかもコロナの時に、みんなが買えないとか買え控えしている時よりも、コロナが明けたあとの方が需要が収縮しているって、どう考えたって日本経済がヤバい状態な訳ですよね。そして、今日、これは未だ発表が速報の値ではありますけども、四半期ＧＤＰは、二期連続マイナス。最終的に確報になって１兆、ちょっとだけプラスになりましたけど。今月中に発表される四半期速報は、おそらくマイナスなるだろうと言われていますし、日本時間だと明日ですかね、ＩＭＦの世界経済見通しも、これは未だチャプターが２章と３章しかないんですが、あまりいい結果じゃないと。私も、ざっとしか読んでいないんですけど、そういう状況になっている中で、どうしたら金融緩和をやめるとか緊縮財政とか増税とかね、日本って今、そんなに景気が過熱しているんですかって言うと、全然、そうじゃないじゃないですか。

むしろ、どんどん景気が冷え込んでいる中で、あの人達って、もう日本経済がどうなっているとか実態がどうかっていうことを無視して、とにかく正におっしゃるザイム真理教だとか、私は日銀を引き締め真理教って呼んでいるんですけども、正に、そういうある種カルト教団の教義のような形で今、話を進めていると。

これが奴らのシナリオですよね。いいですか、これ。マイナス金利を解除して、4月に、その月例か何かの中でデフレ脱却宣言。デフレが脱却しているかどうかじゃないんです。その中でデフレを脱却したんだと。俺が言ったらデフレは脱却するんだという話を言って、本当に実質的に利上げってことで他の金融緩和も終わらせていって、要は、緩和的な状況を維持すると言っていますが、それも終わらせるようにしていって、最終的に６月の新骨太の方針でプライマリーバランスを更に強化して、という形で緊縮増税を進めて行くっていう、今、そのシナリオで、この手前まで来ていますよね。

今月中に、デフレ脱却宣言をやりますから。まぁ、あの人達っていうのは正に財務省と日銀ですけど、日本経済、国民経済のことを何も考えていないと」

水島「まぁ、そうなんですけどね。だから、一体、どうして、そうなりゃ本当に良くなると思っているのか、普通の考えだと全然分からないんだけど…」

室伏「だから最近も財政制度等審議会の資料も、ざらっと読みましたけど、例えば、不都合な真実は、もう、どんどん明るみに出ているので、酷い資料だと政府の債務残高と成長率には関係が無いと。政府の債務残高が増えても成長しないんだと言っている訳ですけど、いや、違うだろうと。政府の財政支出が成長の関係なのに、それを財政支出は成長の相関をとると、明らかに相関があるのは、もうバレちゃっている訳です」

水島「うん」

室伏「だから財政出動をやらずに債務残高っていう言い方をして、ごまかしているんですね」

水島「う～ん…」

室伏「まぁ、他にも、これまでもねぇ、財務省も経産省も数字のごまかしとか統計データのごまかしってやってきていますけど、本当に酷いですね」

水島「う～ん…」

室伏「あとは、まぁ、このあとも議論になると思いますけど、今、財務省は、岸田政権ですが、日本の人口減少対策、少子化対策をする気がなくて、人口減少所与のものとして、今、財政とか様々な政策を考えるっていうことになってしまっています。これは僕の動画でも解説をしましたけど、その心は何かと言うと、私から見ると、財務省は人が減れば財政支出を減らせるからいいんじゃないと、まぁ、そういう中学生並みの頭で考えていると」

水島「う～ん」

室伏「だから、今、本当に残念ながら、もう、そんな状況ですよね」

あんどう「能登の復興もするなと言っていますから」

室伏「言っていますからね。だから集約、恐らく絶対、コンパクトシティとか言うだろうと思ったら、案の定、集約型でやれということを言って、増田寛也分科会長代理がそういうこ

とを平気で言っていましたからね。うん」

水島「いや、だから、ああいう理屈が公然と言われるしね、それだったら、結局、みんな、都市に集まれっていうだけだからね」

室伏「えぇ」

森永「先程、田中先生がおっしゃったことは全面的に賛成ですけれども、一つだけ認識が違うのは、田中先生が植田和男さんのことを学者って言ったんですけど、彼は学者ではないんですよ」

水島「なるほど」

森永「政商です。竹中平蔵と同じ分類のね」

水島「あぁ」

一同「（笑）」

森永「ね。私が大学に入った時に、同級生ではないですけど、実は、植田さんは未だ大学にいらしたんですよ」

水島「はい」

森永「人間の性格って、そう簡単に変わらなくて、当時からお金が大好きで、まぁ、女性も、当時はイケメンだったんです。もう、もてて、もてて俗物の塊でしたね」

水島「あぁ、なるほど」

一同「（笑）」

森永「今、彼が何の為に行動しているかって言うと、金融村を儲けさせようとしているんですよ」

水島「うん」

森永「このマイナス金利の解除で、まぁ、マイナス金利を導入したあと、日銀に預託した金に０．１％のペナルティを課しているんです。それは無くなりましたよね。銀行業界はこれだけで３００億ぐらい利益が出ているんです。しかも貸出金利は正確に短プラに連動するので正確には言えないですけど、まぁ０．２ぐらい先食いして上がっているんですよ。だから、その内０．１が、このマイナス金利解除の効果だとすると、預金金利で国民に戻したのって、その内２割です。

つまり８割が銀行の懐に入るんですよ。私は、ざっくり計算するとマイナス金利の解除だけで１千億円以上の金が今、銀行業界に雪崩れ込んでいる訳ですね」

水島「なるほどねぇ」

森永「利上げを続ければ、とてつもない利益が銀行業界に入って来るんです」

水島「なるほどぉ～」

森永「だから未だ誰も予想していないですけど、私一人が言っているのは、植田さんは、日

銀総裁の任期を終えると同時に金融村に天下りするだろうと」

水島「なるほどね（笑）」

森永「これは、どのメディアも未だ言っていないですけど、私は、もう９０％以上の確率で、そうなると思っています」

水島「なるほどねぇ。でも、そういう構造って、そこには日本が無いですよね（失笑）」

森永「えぇ」

水島「日本の国民とかね」

森永「でも、私は銀行の子会社でも、ずぅっと働いていたんですけれども、実は金融緩和策で一番、傷んだのが銀行員だった訳ですね」

水島「うん」

森永「アベノミクスになる前って、大手銀行に入ると、３０になったぐらいで年収１千万円になって、４０手前で次長になると年収２千万円を超えていたんですよ。だから、今、ボロボロです」

水島「あぁ～」

森永「だから、あの時の濡れ手に粟の大儲けをしたいっていうのが多分、銀行員の本音で、それを実現してくれる神様みたいな存在が植田総裁です」

水島「あれは期待の星な訳だ。そうかぁ～」

森永「だから、結局、何が起こるかって言うと、どんどん利上げをしていくと、銀行業界は絶対、儲かるんです。じゃあ、そのツケを誰が払うかと言うと、運転資金を借りている中小企業と住宅ローンを払っている国民。そこから金を奪って銀行員の処遇を改善しようっていうのが、まぁ、誰も言わないけど、私は本音だと思います」

水島「なるほどねぇ。今のお話を聞いているとそうなりますよね」

森永「絶対、そうなるんです」

水島「う～ん」

田中「正に、そうだと思いますよ。植田さんのテキストに書いてありますよ。だから、金融機関にリフレ政策をやって苦境に陥れていると。じゃあ逆に読めば、そういった大胆な金融緩和はやめれば、金融業界は助かるという風にも読めますよね。所謂、預貸金利差なんかを見ると、正に植田さんが去年、ＹＣＣを修正してから、この両方の格差が上がって来ていますので拡大してきていますから、森永さんが言ったように民間から金融機関に資金がきれいに移動しているっていうね、そういうのが見て取れると思うんですよ。

だから新しい情報を今、学んで、確かに昔の写真を見ると、植田さんはイケメンにも思えますが今は、ちょっと、こう…」

森永「（笑）」

田中「ちょっと死神博士、入ってきたかなぁっていう感じがするんですけど」

一同「(笑)」

田中「顔のことを言ったら、俺も言えないんで、火星人っぽいっていう顔ですけど」

水島「それで言ってるんだ（笑)」

田中「タコ星人 VS イカ星人になっちゃって不毛な戦いですけど、それを置いておいて、やはり、僕ね、日本型のエリートって、例えば東大とかね、僕は早稲田なんで、東大の人は、僕より頭がいいと思うんですよ。大体、当社比で２割３割と。じゃあ、その頭のいい部分を、その余力として何処に使っているのかっていうのが日本のエリートにとって問われるところですよね。

植田さんは、森永さんの情報によると、お金と色の方に行っている訳ですよ、その余力をね。綺麗事のように聞こえても、本当は日本の国家、国民の為にそれを使うべきなのがエリートの本務だと思うんですよ。そうじゃないと、こんな教育制度を態々完備してやる必要も無くなって来る訳ですよ。早稲田出身に比べて東大の人は頭の余力もですねぇ、まぁ、森永さんは、ちゃんと使って下さっていますが…」

森永「いえいえ」

田中「これを観ている人の中に何人、そういう東大卒の人が居るか分かりませんが、是非、頭の余力をそういったところに使って貰わないと、本当に日本は駄目だと思いますよ。エリートの数も少ないですし、少ない中で腐敗していますから、これは、段々発展途上国みたいになってきちゃって…」

水島「うん。本当にその通りになっているね」

田中「この日銀のリーク問題の百花繚乱ぶり見て、完全にヤバいと思いましたね」

水島「そうだよねぇ」

田中「恐らく日銀は、日経さんとか色んな所に優先しているんですけど、どんどんリークの先を段々、それを割り振って来るんですよ。今度はあなたのメディア、今度は、あなたのメディアって言ってねぇ、その内、昔もそうでしたけど、また、日銀副総裁あたりにメディア出身者を入れて、恐らく完結するんじゃないですか」

森永「(笑)」

水島「ねぇ」

田中「だから、もう本当に村社会全開ですよね」

水島「うーん、いや、その金融村っていうのは、田村さんね、さっき言ったように、つまり金融のトップがそういう状態でね。財務省が変わらず一貫した縮小路線。うちの増税なんとかメガネは相変わらずですよね。外資をどんどん導入する。これは正直な話、辛いけれども救いようがない状態みたいな気がするんだけどね」

田村「まぁ、ハッキリ言って、日銀は財務資金教（苦笑）まぁ、利上げ教ですよね。利上げ集団ですよ。昔、私も日銀の担当をやりましたけど、まぁ、かなり昔の話ですよ。そうした

ら時の総裁が何を言ったかと言うと、田村君なぁ、日銀というか中央銀行は、宴会たけなわという時に料理を全部、取り下げるんだよと。これが日銀ですってね（笑）。だけど、僕は、その話を聞いていて、今、思い出したんだけど、この植田さんという人はね、未だ客が来る前から、もう料理を下げるんだよね（笑）」

一同「（笑）」

田村「確かにね（笑）。もう昔のオールド日銀より、もっと酷いじゃないかと（笑）。何故、植田さんは、あんなにあぁなのかと思ったんだけどね、結局、植田さんを選ぶ時のね、日銀の某幹部が色々ゲロってたけど、要するに植田さんと日銀と物凄く相性がいいんだと。

それで、ただ日銀出身の副総裁だった雨宮さん、彼をそのまま昇格させちゃったら、要するに異次元金融緩和、大規模緩和をやめるんだと。その時に失敗しちゃったら、どうなるんだと、そうしたら、もう日銀に、これが生涯、禍根を残すと。だからねぇ、植田さんがいいんだと。まぁ、これが本音だろうと思うね。

だけど、植田さんにしたって、要するに古い日銀のね、もっと徹底的にやろうという（笑）、ここに回帰するというね、まぁ、こういうことなんだなぁと思ったんだけど、もうね、古い日銀なんて全然１９７０年代ぐらいまでの話だからね。もう、いい加減にせんかいと。いや、だから本当に、これはどうしようもない。田中先生は何、東大卒のエリート集団、冗談じゃないですよ。僕は、そんなに頭のいい奴にお目にかかったことはないなぁ。みんな、失敗していますからね」

森永「頭は良くないんですよ。人に取り入るのが凄く上手い人ですね。私が大学の経済学部に居た時に、一番優秀な学生って宇沢弘文ゼミというのに行ったんですね。それで宇沢先生は凄く厳しい先生で、ちょっと出来が悪いと、もうゼミ生をバンバン切って行くんですよ」

一同「へぇ～」

森永「一人も卒業できなかった年もあったぐらいなんですけど、植田さんは、数学科か何か出て途中から経済学部に入って宇沢弘文のゼミですよ。もう宇沢弘文さえ篭絡して、最後、二人でお酒を飲めるような関係まで、もっていく」

水島「へぇ～」

森永「そこら辺の人たらしの能力は物凄いです」

水島「なるほど」

森永「だから学者じゃないんですよ」

田中「政商」

森永「えぇ、政商」

水島「なるほどね」

森永「その政商を金融政策のトップに据えちゃったっていう、この不幸」

水島「あぁ～」

田中「あぁ～」

森永「日本をむちゃくちゃにするんですね」

田中「今、マスコミをたらし込んでいると」

森永「そうそう、そうそう」

田中「金融業界も含めて」

森永「はい」

水島「それでね、結局、本当にその通りだと思うんだけども、これで、今ね、この３０年も、こういう状態が続いて酷い状態になっているのにね、彼らは、これで利上げしながら上手く行くと本気で思っているんですかね。信じられないんだけどね。いや、私は経済の素人っていうことで考えれば、とにかく景気も良くなるし、みんな、収入も上がるしね、国内で色んな生産が出来るようになる。これをやる為には全然金融緩和なんて当たり前だし、財政出動もしなきゃいけないってね、こういうような普通の考え方、一般の細かい経済は解らなくても、そういうのを感じるんだけど、今、やっていることっていうのは、どんどん悪くなるでしょう。それで外資ばかり入って来るみたいなね。それで今、企業とか土地を買っている訳じゃないですか。良い事が一つも無いっていうね」

森永「だから、それでいいと思っているんですよ」

水島「うん、うん」

森永「何故かと言うと、財務省の前財務次官、事務次官が発言しているし、経団連の会長も同じことを言っているんですけれども、アベノミクスの金融緩和、異次元緩和っていうのはプラスの効果も持ったかもしれないけれども、本来だったら生き残っていけない企業を温存してしまったんだと。これからの日本は、そのゾンビ企業を片っ端から清算していかないといけないって。

そこで解放された資源、労働力だとか資本だとか店舗だとか、そういうのを成長産業に振り向ける。今から百年ぐらい前に、ジョセフ・シュンペーターとアーヴィング・フィッシャーで、こう、経済論争が戦わされたんですね。それでフィッシャーが何て言ったかというと、創造的破壊だと。生産主義だと。もうぶっ壊せって」

水島「うん」

森永「そうすれば新しい成長の芽が出て来る。でも、アービン・フィッシャーは何て言ったかっていうと、経済っていうのは鞭のようなものだと。だから下に引っ張っても普通だったら手を離せば、びよ～んって戻るけれども、あまりに強く引っ張り過ぎるとボキッと折れて二度と戻らなくなる。だからリフレ政策は必要なんだ。それが、どっちが正しかったかっていうのは、もう世界恐慌の時に証明されているのに、未だにゾンビ企業と住宅ローン変動で借りたゾンビ国民は全部、潰すぞって言っている」

あんどう「（失笑）」

水島「うん。そう言っている、そういうことですよ」

森永「そう」

水島「だからねぇ、いやぁ、どうするんだっていうね」

田中「それでゾンビ企業論ってね、やっぱり間違いだと思うんですよね。どうしてかって言うと、ゾンビ企業のあらゆる定義を見ても、例えば、金融機関から追加の融資を受けないと、経営が成り立たない企業、それと負債が多いとか、売り上げが悪いとか、そういったものをゾンビ企業と仮定したら、アベノミクス期間中にゾンビ企業の企業比率が凄く下がっている訳ですよ」

水島「うん」

田中「つまりゾンビじゃないんですよ」

水島「うん」

田中「ただ単に景気が悪くて、いい物を造っても買って貰えない訳ですよ」

水島「うん」

田中「それをゾンビ企業って言っているんですよね。馬鹿みたいじゃないですか」

水島「そうだね」

田中「だから景気がよくなったら、ゾンビ企業の比率が急に下がっちゃって国際比率的にも、一番、安定しているんですよ。それは中小企業も同じですよ」

水島「うん」

田中「今、ゾンビ企業叩きっていうのはね、ゾンビ企業が大好きな人達は、コロナ禍でゼロゼロ融資を経由しているじゃないですか。それは金融、金利が上がれば、やはり経営が苦しいっていうところだって出てきますよね」

水島「そりゃその通りですね」

田中「でも、それを、ちゃんと繋ぎ融資してあげて経済状況を安定化させれば、ゾンビ企業だったものが減るんだけど、それでは都合が悪いんですよ。財界も政商的な経済学者達も。自分達のやるべきことはね、そういったゾンビ企業を叩き潰して、まぁ、言ってみれば上手い事、損切して、そこで余ったお金とか資源を自分達のいいような別なものに振り向けたい訳ですよね。

だから狙いは市場原理みたいなことを追求していながら、本音は、自分達の都合のいいところにお金や人材を振り向けたい訳ですね」

水島「うんうん」

田中「だから、本当におかしいんですよ。あの竹中平蔵って昔、今の岸田さんが言ったようなことを言っていたんですよ。『貯蓄から投資へ』って」

水島「あぁ、なるほど」

田中「それで、ゆうちょを郵政民営化したら、みんなが投資するようになると」

水島「ありましたね」

田中「残念ながら、その時は高橋洋一さんが竹中平蔵さんと友達なので、僕との間では凄く

論争したんですよ。郵政民営化したって、そんなのは景気が悪ければ、民間の人は誰も貯蓄を崩して投資なんかはしないよと言ったんだけども、でも、いや、郵政民営化はそういう効果もあるんだと。絶対に無いと」

水島「うん。なかったね」

田中「えぇ。そう言ったんですけれども、つまり郵政民営化っていうのは、要するに自分達の都合のいい所に、民間の資金を割り振りたい訳ですよね」

水島「うん。うん…」

田中「その流れの中でゾンビ企業論っていうのも出て来るんですよ。ゾンビ企業は駄目だと。本当はいい企業もいっぱい入っているのに。それを今の内に潰して、そこに貼り付いている人材だとかお金を、別な自分達の都合のいいところに移動させたいと。そういう思惑でしょうね。でも、それが本当に上手く行くかって言うと、そんなことは、ある訳がないですから」

水島「うん、ないよねぇ」

森永「そうそう、そう。リスキリングっていうんですけど、中高年のおっさんが失業して、ちょいと教育訓練を受けて、例えば、人工知能の開発とか宇宙開発が出来ますかねっていう（失笑）」

一同「（笑）」

森永「そんなことは、出来る訳ねぇだろうって直ぐ解るじゃないですか」

水島「うん、そうだよねぇ」

田中「馬鹿にするのもいい加減にしろ、ですわ」

室伏「ブリーフィングされてモデルを創っているのはグローバル・フォーラムですよね」

一同「あぁ～」

室伏「このロジックツリーみたいなやつをＰＷＣが作って、あそこは日本語でも載っていますけど、ロジックツリー自体は英語だけかもしれないんですけど、つまり、職とか、それに求められる能力っていうのを世界的に全部、平準化して、それに必要な研修はどれですかと。それを受けていないと、いや、あなたは、この席の研修を受けていないから認めませんっていう形で、完全に労働市場っていうものを蒸気ローラーで、ばぁーっと、ベタァ～っとしたような形にして、あとは何をするかって言うと、それを受けていない貴方には、これだけのお金を払いませんと言って、人件費を下げていくという、完全に悪魔の呪文と言うか、悪魔のプログラムっていうのがリスキリング。

ただ、日本の場合は未だそこまでいっていなくて、単純に、まぁ、Ｐソナとか言いませんけど、そういうところが儲ける為にやっていると。だから、補助金をちょっと出して、あとは自分で払いなさいっていうことで、まぁ、それで大儲けじゃないですか」

森永「そうそう、そうそう」

室伏「みんな、騙されていって、これをやれば、俺はいけるかなぁって言ったって、それ、デジタルだって向き、不向きがありますよね。これまで、ずぅっと積み上げてきたものがあ

るのに、いきなり、それをやるなんて出来る訳が無いし、だから、結局、ゾンビ企業論というものと、それから成長産業とは何かなんて言える訳がないし、それから三位一体労働改革だって、そんなね、何もせずに、じゃあ、そこで、みんな、解雇されちゃいましたと。

その人達が、じゃあ、その成長産業なるものに対して、みんな、わぁ～っと行けるかって、行ける訳が無い訳です。だって雇う側だって、いや、この人は欲しいけど、この人は要らないになる訳じゃないですか。しかも、何故か、あの三位一体労働改革の中では必ず、みんな、給料が上がることになっているんですけど、恐らく殆どの人の給料は下がりますよ」

森永「そう」

水島「そうですね」

室伏「だって需要が増えていないんですから、お金は増えてないですからね。どうやってやるんですかって言ったら、取り敢えず、こちらを削ってここにボンっとつけると。それしか出来ない訳ですからね。だから、そもそも話が完全に破綻しているんですよね。うん」

水島「いや、だからね、これは前に取り上げたんだけど、ＴＳＭＣですけどね、日本の政府が４千億円を出すっていうね、これは深田萌絵さんっていう人の本だけど、４千億円を何処へ出したんだ。そうすると、今、半導体が足りないって言って、トヨタとか自動車産業ですね。この部分の半導体が欲しいのに、ＴＳＭＣが熊本で作るのは全く関係ない半導体で、一体、何の為にやるかって言ったら外国へ輸出するだけというような、非常に矛盾した形のものでね。その４千億円のお金は何処へ行くんだと。

もっと言えば、それを造ったら、熊本のＴＳＭＣは日本の企業に優先的に半導体を供給するのかと。それも無い。約束を全くしていない。だから、このお金は結局、日本のお金を使って、彼らが好きな世界的な商売をするだけ。

もう一つ言うと、環境汚染で台湾の中でも色々起きているから、今度は水を大量に使うんで、熊本に環境汚染問題が起こるだろうとか色んなものがあって、今言った様に、そういう財政から出動させるものすら、こういう状態になっている。金融とか財政とかね、これが本当にめちゃくちゃになっているんじゃないかっていうねぇ」

森永「実は、これもアメリカの圧力がかかっていて…」

水島「そうだね」

森永「そのＴＳＭＣ熊本の工場では回路幅が大体１２から１６ぐらいの汎用品」

水島「うん」

森永「誰でも造れるやつを造る訳ですよ。だけどアメリカはテキサスだったと思いますけどＴＳＭＣの工場を誘致しているんですね」

水島「はい」

森永「そこは３ナノっていう最先端の半導体を造るって。何故、同じ補助金出して…」

水島「そうなんですよ（苦笑）」

森永「アメリカは価格が安定していて成長性のある工場を建てるのに、日本は誰でも造れる

ような半導体を作って環境をぶっ壊すんだっていうお話です」

水島「そういうことです。それで役に立たないっていうね」

森永「うん」

水島「それと、やっぱり人件費の問題も含めてね、ＩＴ産業のああいうもの自体は、あまり、値段が上がる、下がるっていうのは、むしろ設備で造るものだから、全く日本の熊本に落ちるかって言うと、中々、お金が落ちる訳じゃないっていうね。そういう意味では英語ですね。日本人の雇用は増えるかって言ったら、そうじゃなくて台湾から連れて来るとか、そういう風になっちゃう。こういう実態が、どんどん出て来ているっていうねぇ、これは、どうなんだろう、あれは経産省マターかな」

室伏「あれは経産省ですね」

水島「うん。つまり、そういう色んな投資とか、そのお金を出す事が、決して日本の企業になっていないっていうね。その絞りながら、また出すのも、そういう風になっているっていう感じがあるんですけど。もう森永さんはずっと、こういう経済、日本の政府の経済を見て、３０年の空白があって、空白っていうか、むしろマイナスですよね」

森永「はい」

水島「こういう状態があったっていうのは、この本の中にもありますけど、勿論、財務省の…」

森永「私は両輪だと思っていて、財務省が過度な緊縮財政を強いて…」

水島「はい、やりましたねぇ」

森永「国民負担を、どんどん上げていった訳ですね。私が社会に出た１９８０年は、国民負担率３割だったです、今、５割まで来て…」

水島「そうなんですよ、半分も取られているんですよね」

森永「当時と消費税を勘案すると、世帯主の手取り収入って減っているんです。だから所得が減って経済が成長するはずがないですね」

水島「無いです」

森永「それが一つと、もう一つは、この『書いてはいけない』って、実は１か月ちょっとで、今、２０万部、売れたんです」

水島「おぉ、凄い」

森永「うん。大手メディアは徹底的に無視しているんですけど、一番、無視されているのは日本航空１２３便の墜落事件だったんですね」

水島「あぁ、これですね」

森永「これ、実は事故調査委員会自身が何年か前に付属資料を発表して、ボーイング社が圧力隔壁の修理をミスして墜落したことになっているんですけど、実は、墜落原因は、そうではない」

水島「はい」

森永「尾翼に異常外力が加わったことによって尾翼が壊れて、中から緩やかに空気が噴き出したんだという風に、お上自体が認めている訳です」

水島「うん」

森永「実は、証言だとか証拠っていうのは無数にあって、実際には、何が当たったのかっていうのは、よく判らないんですけど、自衛隊が使っていた訓練用の非炸薬、爆弾の入っていないミサイルが当たったか、無人標的機が誤って当たったか分からないですけど、自衛隊が壊しちゃったと」

水島「まぁ、そうですよね」

森永「結局、米軍は横田基地に誘導して、もう航路を見ると、横田基地に着陸する寸前まで行っているんですけど、そこで何処からか圧力がかかって来て着陸したら駄目だって」

水島「あぁ」

森永「それで北に行けって言って、北に向かって、二度目のチャンスは長野県の川上村って言ったかな、そこのレタス畑に不時着しようとしたんですけど、それも妨害されて、結局、御巣鷹に行って、ここは１００％ではないんですけれども、最後は恐らくジャンボジェット機の第４エンジンっていうのが粉々になって現地に散乱したんですね。一応、お上の説明は立ち木に当たってエンジンが粉々になった。でもね、エンジン一個で７トンもあるんですよ」

水島「あり得ないですよ」

森永「その生木に１本当たっただけで、粉々になる訳じゃない」

水島「うん」

森永「そんなはずが無い訳ですね。恐らく１２３便を追尾していた自衛隊のファントム機が最後にミサイルで撃ち落としたんだと、私は思っているんですけれども、そのことを全部、ボーイング社に泥を被って貰った訳です。自分のところの修理ミスだ」

水島「うん。うんうん」

森永「でも、そのツケは大きくて、結局、４０日後にプラザ合意っていうのが開かれて１年ちょっとかな、２４０円だった為替が１２０円まで２倍の円高になる訳です。その翌年に日米半導体協定が結ばれて、５０％あった日本の半導体シェアが今や１０％になっている訳です」

水島「そうですね」

森永「そのあと日米構造協議っていうのがあってね」

水島「年次要望書とね」

森永「うん、そうそう。年次改革要望書が出て来る。私は、実はシンクタンクに居た時に、経産省の委託を受けて日米構造協議の、まぁ、使いっ走り、小僧をやっていたんですよね」

水島「うん」

森永「だから、私は交渉の場には出ていないんですけど、アメリカにも小僧が居るんです」

水島「うん」

森永「資料を運搬したり、資料を作ったりする」

水島「なるほど」

森永「小僧同士は門前の小僧なので話が出来るので、そのアメリカ人が私に何と言ったかと言うと、これは日米交渉なのに、何故、日本は全面服従でアメリカの言う事を最初から最後まで全部、受け入れるんだと」

水島「うん」

森永「おかしいだろうと。これは交渉じゃないぞ」

水島「うん」

森永「なんで日本って、そんな対米全面隷属をするんだいって聞かれて、私は当時、答えられなかったですよ」

水島「うん」

森永「何故ですかね」

水島「うん」

森永「でも、私は原点が日航１２３便で借りをつくっちゃったのが延々と、もう４０年近く続いているっていうのが原因だと、私は思っています」

水島「そうですねぇ。このことは、本当にメディアが一切、伝えていませんし、今、そういうお話の圧力隔壁の話もあり得ないし、エンジンの爆発もあり得ないし、生木に当たって、それから、あれだけ現場が焼かれた状態になっているっていうのも、おっしゃる通りで、これはその通りですよね。つまり、この辺のところ、ここぐらいまでは出ているんですね。

自衛隊から何か撃った、模擬弾か何か判らないけれども、あれが尾翼にぶつかって、それが、きっかけになっているっていうね、これは、森永さん、あれですか。そうすると非常に大事な話ですけれども、そういう今言った使いっ走りっていうのをおっしゃっていたけど、その辺の所から漏れた情報ですか」

森永「いやいや、もう、これ、実は本を出してから、多くの人から連絡を貰ったんですけれども、お前が、この本に書いたことは、みんな、知っている話だと」

水島「あぁ、なるほど（失笑）」

森永「みんな、知っているのに、お前は書いてしまったっていう（失笑）」

水島「あぁ、そういう感じですか」

森永「そうそう、そうです。新たな証言っていうのもいっぱい出て来ていて、例えば、夕方、墜落した訳ですね」

水島「うん」

森永「最近、調べたら現場に一番、初めに近くに駆けつけたのは、実は、大手メディアではなくてラジオの文化放送の記者が、たまたま遊びに行って近くに居て、最初に北相木村っていう所に落ちたっていう偽情報が流されたんですよ。ところが、そこに着いて山を見ると、その山の裏っ側が御巣鷹の尾根なんですね。そこから赤い炎が見えて心が痛んだと書いてあって」

水島「ほぉ」

森永「私は文化放送に頼んで、社報も全部、調べさせて貰ったんです。それで彼の行動っていうのは、正にその通りだったっていうのも判っているし、だからメディアが報道している訳ですよ。それなのに翌朝まで何処に墜落したかって一切、明らかにしませんでした」

水島「いや、それがあり得ない話ですよね。うん」

森永「でも、その間に何が成されたかって言うと、実は、写真業界関係者が警察に頼まれて現場の証拠写真を撮って、それを現像プリントした。もう遺体がカリカリになるまで、炭化していたんですよ」

水島「はい」

森永「そんな炭化するっていうのは、あり得ないですね」

水島「あり得ないです。ほんと、あり得ないです。色んな飛行機事故、ありますけどね」

森永「はい。その現場では、ガソリンとタールを混ぜたような異臭が漂っていた。このゲル燃料っていうのは軍隊が使う火炎放射器の燃料がそうです」

水島「うん」

森永「実は、青山透子さんっていう元日本航空の客室乗務員の人が人生をかけて、この問題を追及しているんですけど、御巣鷹の尾根に未だ遺物が残っているんですよ。彼女がそれを化学分析したら、その遺物からベンゼン環が検出されたんですね」

水島「あぁ」

森永「実は、航空ジェット燃料にはベンゼン環は存在しないんです」

水島「うん」

森永「それはガソリンに存在しているものですよ。だけど飛行機はガソリンを積まないです。何故かって言うと、引火点が低くって、ガソリンで飛んだら危なくってしょうがない訳ですね」

水島「うん」

森永「だから、やっぱり現場の証拠を隠滅する為に焼き払った。それに夕方から朝にかけての時間が必要だった。自衛隊の特殊部隊、まぁ、別班って言われている人達がやったんだろうな。４人、生存者が居たじゃないですか。あの４人は後ろの方に座っていて、すげの沢っていう沢を転げ落ちちゃっているんですよ。転げ落ちて瓦礫の山の中に埋もれていたのを、翌日の朝、その上の村の消防団が山を上がって行って彼らを見つけたんです」

水島「あぁ、なるほど」

森永「えぇ、だから現場に居なかったので」

水島「分からなかった」

森永「だから助かったんだと、私は思っているんです」

水島「まぁねぇ、この話をすると、もうキリがないかも分からないですけども、ただ、我々も、あの翌朝からのを映像を見た時に、やはり普通の飛行機事故じゃない感じはあったし、何故、こんなにきれいに焼けているんだろう。事故でバラバラになっているはずなんですよ」

森永「はい」

水島「それからジェット燃料が燃えるとしても、これだけ綺麗に全部、ああなって、それから死体も何も見えないようにしていると言いましたけど、出ないんですよ。私も映像の専門で、一応、映画監督をやっているから色々解るんだけど、これは何かねぇ、本当に物凄く違和感がありましたね」

森永「うん」

水島「ただ、その時は未だ全然、疑うっていうことに及ばないから、本当に悼ましい事故だと思いましたね。うん、それですよね」

森永「もう一つ、その大きな根拠なのが、私は２０００年にニュースステーションのコメンテーターを始めて、全盛期はテレビ、ラジオのレギュラー１６本か１７本を持っていたんですね」

水島「そうでしたね、随分、ありましたね」

森永「全てのレギュラー番組のディレクターに、この１２３便の検証番組をやりましょうと。だから結論を強制するではなくて何が起こったのかっていうのを、きちんと検証しましょうという提案をして、全部、拒否されました。まぁ、一つ、二つだけ放送直前まで行ったんですけど、何故か放送１０分前ぐらいに天から圧力が降って来て、放送が中止されるんですよ」

水島「あぁあぁ…」

森永「だから、これだけ圧力がかかるっていうのは、やっぱり何かヤバいのかなぁと」

水島「まぁ、完全にそうでしょうね。やっぱりねぇ、その飛行機の問題も、それから言われている自衛隊の問題、尾翼が吹っ飛んだとか言っているけど、あり得ないんですよね」

森永「うん、あり得ない」

水島「よっぽど何かぶつけられてね、あのう、撃たれるとか何かされないとね。結局、そういうことが全然、検証されないまま終わっちゃったんですよね。痛ましい事故っていう形だけで」

森永「そこの真実を明らかになるコックピット・ボイスレコーダーとフライトレコーダーを日本航空は持っています」

水島「うん、うん」

森永「だから、それを公開するだけで全てが判ります」

水島「うん」

森永「まず、そこから始めて、日本は独立国としてアメリカと対等に付き合えるように変えないと、このまま発展途上国へ、まっしぐらに落ちて行きますよ」

水島「全く、今言ったように、一回、着陸しようとした、それが出来そうだったけど断られたとか。こういう問題もね、やっぱり当然、関東の上空はアメリカが管理していると言うかね」

森永「だって横田空域は許可が無いと全然、飛べない訳でしょ」

水島「飛べないですね。それと、最近、はっきり判ったのは、東京の上空も飛んじゃいけないけど、無許可でアメリカの飛行機がどんどん飛んでいるということですよ」

森永「はぁ」

水島「これも記録としてあるんですよね。ただ政府は言わないけど」

森永「でも同じ敗戦国のドイツは、ドイツが航空管制しているんですよ」

水島「はい」

森永「日本だけです」

水島「そうですね」

森永「はい」

水島「だから横田基地っていうのは、どういう意味合いを持っているか。さっき言ったように、所謂、アメリカが東京とかそういうものを、ちゃんと管理する為の空域でもあるし、そういう場所である」

森永「そりゃそうですね」

水島「だから、この日航の飛行機の問題もね、やっぱり、そういうものに関連してみると、本当の事が見えて来るっていうか。皆さん、こういう問題も、今日、森永さんに、せっかくお出で戴いているので、是非、こういう話を聞いておきたいというか、森永さんぐらいしか、このことを本気で言った方は居ないから」

森永「うん」

水島「正直、言って、今、居ないですよね」

森永「だって、これ、命懸けですよ」

水島「そうですよ」

森永「癌の宣告をされて、まぁ、どうせ死んじゃうんだったら、最後に本当のことを言って死のうって思ったんです（笑）」

水島「いや、その…いや、これは貴重な話で、今、言った、この３つもね、今日は勿論、経済討論ではあるけれども、こういう中にちゃんと表れているというか、この３つのメインのタブーはジャニーズの性加害。財務省のカルト的財政緊縮主義、それから日航事件と」

森永「はい」

水島「こういうことを考えた時、さっき言ったように財務省、だから、うちの討論でも何年も前にやっている時、みんなが割と言うんですよね、財務省は馬鹿だから。そうじゃなかった訳ですよね。馬鹿じゃなくて、ちゃんと意図的にやっていたっていうね、緊縮財政は今もそうですけどね。

それから、せっかく今日、お出で戴いたんで、このジャニーズの性加害について、これは、我々も、ある程度、取り上げたんですけど、中々、具体的な話がね、私も、ずっと芸能って言うかテレビディレクターとか、まぁ、ドラマが中心ですけど、ドキュメンタリーもやっていました。この話は、ある程度、聞いていましたけど、森永さんとしては皆さんに細かく読んで貰うっていうのが一番、いいんだけど、このことも少し言及しておいてくれますか」

森永「実は、私が、この『書いてはいけない』を書こうと思った、そもそものきっかけっていうのは、実は、私の仕事の半分が情報報道番組で、残りの半分はバラエティだったんですよ」

水島「はい、そうですね」

森永「だから芸能リポーターの人とも、ずぅ～っと、この２０年以上、仕事をしてきたんですね。ＢＢＣが報じて、性加害問題が明らかになった時、一緒に仕事をしてきた芸能リポーターの皆さんが口を揃えて、このようにインタビューに答えました」

水島「はい」

森永「『私は噂ではちょっと聞いたことがあったんですけど、まさか、こんなことが起きているなんて夢にも思いませんでした』っていうコメントをテレビで観て、私は画面に向かって、お前ら、嘘つくんじゃねぇぞぉって、もうブチ切れたんですよ」

水島「全くその通りですよね」

森永「私は芸能界の圏外に存在するんですけど、私でも９割がた知っていました」

水島「うん」

森永「彼らは、もう密接にやっていたので絶対、１００％近く知っている訳ですよ」

水島「はい、一番、知っている。はい、知っています」

森永「それをずぅっと、とぼけて真実から目を逸らすっていうのは絶対に許してはならない。ただ海外メディアが動けば、日本のメディアも動かざるを得ない、特に報道は動かざるを得ないんだっていうことで、この財務省と日航の問題も動くんじゃないかっていう淡い期待があったんですけど、動かなかったですね」

水島「うん」

森永「実は、これを言うと妨害になっちゃうかもしれないですけど、突破口を海外メディアに求めたんですよ」

水島「うん」

森永「私はインタビューも受けたんですけど、実は、そこにも圧力がかかっていて」

水島「はい、そうでしょうね」

森永「日本からその海外メディアを止めに行く訳です。だから、もうねぇ、ヒデェ話です」

水島「いや、だからね、まぁ、私は勝手に言いますからね。この問題で言うと、アメリカにもエプスタイン（Jeffrey Epstein） 事件ってあるじゃないですか。子供にちょっかい出したっていう人とかね、つまりジャニーさんっていうのはアメリカに居た人で、ずっと、こういう形でジャニーズ事務所って運営されていたと。芸能界っていうのは、実は、こっち系の人とか色んなプロダクションがあって、ジャニーズ事務所もそうだし、吉本興業もそうだし、もう、みんな、テレビ局に株を持って大きな影響力を持っている。

じゃあ、誰が、そういうものをやっているか、或いは、創価学会の民音とか、或いは学会系というのも、そうですよね。そういう中で、このジャニーさんのところが叩かれると言うか、表に出たっていうのは、ある程度、私は、そういうものがあったと思うんですよ。それも、それまでは今、森永さんが言ったように、ハッキリ言うと、特に音楽系は多いと思います。私はドラマとかドキュメンタリーだったから、あまり、そういうのが無いんだけど、その私でさえも４～５０年やっていましたから、そういうのがあるんだっていうのは聞いていましたからね。

音楽系テレビ・プロデューサーが、かなり有名な元歌手の女優さんだったけど、歌手の頃、いつでも呼ぶから、欲しかったら呼んでくれよって言われましたからね。勿論、私は呼んでいませんけど、そういうようなことが当たり前の話でね。もう一つは、こういう中で政治とも関わると、私は、あまり細かく言うと、証拠を見せろって言われると言えないんですけど、はっきりしていますけれど、政治家のそっち系の奴、バイの人なんか本当に居ますからね。こういう子達をやっている奴も居る訳ですよ。だから子供にちょっかい出す奴は本当に居たんですよ。

こういうこと自体が単なるジャニー喜多川さんの性加害だけじゃない、政治とか、そっちの、もっと言えば、海外の、こういう形で情報機関がね、下半身から財布迄、全部やる、大きな一つのあれになっていたっていうところも、私なんか考えているぐらいでね。いや、でも、本当に勇気のあることで、さすがに、この本は命懸けでおやりになっているっていうことで、圧力がかかんないですか」

森永「だから多分、こいつは、もう直ぐ死んじゃうから、私は、原発不明癌の終末期っていう診断になっているんですよ」

水島「あぁ…」

森永「もう直ぐ死んじゃう奴を殺しても、あまり意味がない（笑）」

水島「それ、シャレにならないんだけども」

森永「いえいえ、いや（笑）」

水島「でも失礼ながら、今、凄くお元気そうで、体力は落ちているかも分からないけど」

森永「あぁ、そうです。頭と口は大丈夫ですけど」

水島「そうですよね。あまり偽善的なことを言いたくないですけど、本当に命懸けで、こういう言論の活動をしていることに敬意を表したいと思うんですけど、この喜多川さんの問題、

それからジャニーズ事務所の問題ですねぇ、その他に、もう一つ、さっきから出ていますけど財務省ですね」

森永「はい」

水島「ひとつ、ここで言う、財務省のカルト的財政緊縮主義、これについて、これも触れておいてくれますか」

森永「実は、日銀と財務省っていうのは同じ体質を元々持っていて、財務省は、増税を勝ち、減税を負けって呼ぶんですよ。日銀は、金利の引き上げを勝ち、引き下げを負け、っていう風に呼ぶんですね」

水島「あぁ、そういう意識だということですね」

森永「財務省の大きな間違いっていうのは、増税した官僚っていうのは、ポイントを貰えて出世して、いい天下り先に行くんです」

水島「なるほど」

森永「日本は、ずぅ〜っと何十年も成長してなかったんですけど…」

水島「うん、３０年ね」

森永「普通の国並みに経済成長していれば、ＧＤＰが二倍にも三倍にもなって…」

水島「うん。なっていますね」

森永「税収も二倍、三倍どころじゃないぐらい入って来る」

水島「はい」

森永「だから本来であれば、彼ら、自然増収って言うんですけれども、それで財政を賄えば、何の問題も無かったのに、何故、その道を選ばないのか」

水島「うん」

森永「何故、経済を大きくしようとしないのかって言うと、自然増収はノーポイントです」

水島「なるほど（笑）。なるほど、そうか（笑）。そういう言い方、なるほどね」

森永「だから、その裏返しが、実はたばこの増税で、煙草の税収ってずぅっと横這いなんですよ。煙草の増税をすると、喫煙者が減るんで、税収は横這いなんです」

水島「結局、横這いになっているんですね」

森永「えぇ。だけど、何故、繰り返すかって言うとポイントになるから」

水島「あぁ、やったと、ポイントですね」

森永「増税をしないといけないですから」

水島「増税、仕事、やりましたポイント」

森永「しかも、その増税ポイントっていうのが税目によって異なっていて、最もポイントが

高いのは、実は消費税なんです」

水島「なるほどね。そうでしょうねぇ、ほんとに。腹立つけど」

森永「いやいや。だからカルトだって」

水島「あぁ、なるほどねぇ、そうですねぇ。こういう人達が経済やっているとなると、本当に辛いんですけどね。まぁ、こういうようなことで、是非、もう２０万、いったそうですけど。これは『書いてはいけない』日本経済、墜落の真相ということで、最後は墜落した日航事件から最後の章は日本経済が墜落していくと」

森永「そう。そこにかけているんです（笑）」

水島「いや、まぁ、本当に墜落しちゃいました（笑）、今、墜落中ですか」

森永「だから、これを何とか救わないといけないから一応、命懸けで戦っているんですけど」

水島「そうですね」

森永「えぇ。中々政治家も言う事を聞かないし…」

水島「本当にね、政治家が言う事を聞かないですね」

森永「野党も立憲民主なんかも全然、聞いてくれないし、実はメディアの報道の人にも随分、話したんですけど、全然、聞いてくれないで」

水島「あぁ～」

森永「まぁ、解らないではないんですよ。彼らが勝負をかけたら、彼らも未だ子育てをしなきゃいけないし、そう簡単にクビになる訳にはいかないので」

水島「まぁねぇ。ただねぇ、産経なんかはねぇ、田村さんみたいな人も居れば、逆の立場も居るしね、両論併記でもいいですからね」

森永「いや、でも産経新聞も、ちゃんと正論を吐いているのは田村さん一人だと、私は思う」

水島「はっきり言うと、そうですけどね（苦笑）、ただ、私が少しだけ評価するとしたら田村さんに書かせているっていうね、それも…」

田村「まぁ、何も知らないからですよ（笑）」

一同「（笑）」

田村「無知なんです」

水島「いやぁ、私は産経新聞をばんばん批判しているから、あまり言えないんだけど、ただね、本当に最低でも、そういう機会、知る機会を与えて貰いたい。今日は、敢えて言うと、先週の日曜日に１万人を超える人達が反パンデミックっていうか、パンデミック法というものに対して１万人ぐらい集まったんですね。海外では数万人が、まぁ、数万人はいっていないと思いますけど、数万人の膨大な人達がパンデミック条約に反対する人が集まったんです。

これは政党から言うと、右から左まで、我々みたいな者から左と言われる極左みたいな人達まで、とにかく人の命と人生を守れというね、勝手にＷＨＯの横暴、横暴と言うか、そうい

う、まぁ、一種のグローバリズムですけども、こういうのを許すなっていう形でやった訳ですが、ところがメディアは一切、報道しません。

例えば、まぁ、これは名前を言わなきゃいいと思いますけど、夕刊フジの記者さんが、その集会に、もう入りきらない程の人数だったんですけども、その集会に来ていたんですけど、どうせ報道しないでしょと言ったら『はい』とね。１００人、２００人でも結構、報道するようなのに、皆さん、１万人ですよ。

私は先頭に立っていたんですけど、先頭の第一梯団から八梯団まであって、一梯団で千人ずつみたいな規模だったと思うんですけど、第一梯団の我々がぐるっと周って戻って来ても、未だ六梯団ぐらいまでしかスタートしていない訳です。それから延々１時間ぐらい経って、全部がスタートしていくっていう状態があっても報道しない。

これは殆ど日航の問題とか、ここにあるタブーの問題と凄く近くて、自分達の意見と違うもの、両論併記も出さないっていうのが、今のメディアの体たらくになっちゃっているっていうことですね。だから森永さんが、いかに大変だったかというのも、私も少しは理解出来たと思うんですけど、段々お約束の時間が無くなって来ましたので、この他にも未だ、皆さんに言っておきたいことがあったら、お話し戴けますかね」

森永「うん、でも、私は、やっぱり報道機関というものの役割っていうのは物凄く大きい」

水島「そうですね」

森永「それがジャニーズ問題でも明らかになったと思うんですけれども、ジャーナリストは骨が無くなってきている」

水島「そうですね」

森永「実は、私の父親は毎日新聞の新聞記者だったんですよ」

水島「うん」

森永「私は、その背中を見て育ったんですけれども、父がジュネーブ支局長をしていた時に、当時の新聞って日曜版になるとカラー写真で、世界の名所旧跡を紹介していたんですけど」

水島「あぁ、ありましたねぇ、はい」

森永「うちの親父が業界で初めて、その名所旧跡の前を現地の子供達が遊んでいるっていう写真を取り入れるっていうことを初めてやったんですよ。実は、ベルンの時計台を撮りに行くって言って、ジュネーブからベルン迄、車で４時間ぐらいかかるんですけど、夜明け前に出て行って、広場で三脚を立てて、うちの親父の頑固なところはバシャバシャ、シャッター切らないんです。プロは一回か二回切れば、瞬間を切り取れるはずだと。

それで、ずぅ～っと待っているんです。私と弟と母親は観光に行って、夕方、戻って来たんです。いい写真が撮れたのって親父に聞いたら、今日はシャッターチャンスが無かったねって言ったんですよ」

水島「ほぉ。いやいや、それは凄い」

森永「うちの親父はウィーン支局長から転勤になったんで、ベルンってドイツ語を喋っているんですけど、当時、私もドイツ語、喋れていたんです。だから、私を使えば現地の子供を

集めて、遊んでいる画なんて、いくらでも作れるんですけどね」

水島「あぁ、そうか、そうか」

森永「うちの親父の主張っていうのは、絶対にジャーナリストはやらせをやってはいけない」

水島「なるほど」

森永「真実を伝えるのがジャーナリストの仕事だって」

水島「う～ん」

森永「だから、そんなことをしているから毎日新聞、潰れちゃったりしたんですけど（笑）。でもね、メディアの報道の人達に、そういう気概が無くなってきているんじゃないかなと」

水島「間違いなくそうですね」

森永「だから、もう、一回、抗おうぜって思うんですけど」

水島「う～ん、そうですね。だから、今、本当に支えているのは、皆さんのような、そういうね、やりながらも人間として、日本人として、やらなきゃいけないこと、発言しなきゃいけないことをしてくれる人達だけで支えているみたいなね。あとは本当に今だけ、金だけ、出世だけみたいな人達ばかりが、本当に増えちゃいましたね」

森永「そう。だから、そのメディアでね、日本は消費税を上げないと財政が持たないとかっていう提灯記事を書いて、それを積み重ねていくと、財政制度等審議会の委員に呼んでくれたりするんです。全部じゃないですよ、一部の人がね」

水島「うん」

森永「そこで、更に実績を積み重ねると、それこそ日銀の審議員になれたり、天下り出来た人も居るぐらいですよ。だけど、何の為にジャーナリストになったんだって、私は言いたい」

水島「そうですね。そうです、そこですね。特に保守の人達を見ると、皆さんは別だと思いますけど、結構、貧しい人が多いんですよ」

森永「うん」

水島「やっぱり物を書いて、調べて、得になる仕事じゃないじゃないですか。金儲けするっていうのは、よっぽど本が売れなきゃ駄目ですけど、そうじゃない人達が、やっぱり認めて貰いたいのが、権力とか、さっきおっしゃった審議員とか何とか委員会で招かれると、私は、安倍さんのところで、昔、安倍さんが首相になる前に勉強会を、ずっと一緒にやっていたんで、よく解るんだけど、それまでは離れていた人達が総理になるって判ったら、もう、自薦、他薦じゃないけど、いや、もう、うわぁ～ってやって来てね、また、第二次安倍内閣の時も、そうだった。だから、私は自慢で言いますけど、安倍さん、おめでとうございました。じゃあ、これで総理になられるんで、私は離れます。外から応援しますからっていう話をしたんですけど、その姿が凄まじいっていうか、もう顧問になりたいとか、アドバイザーとか言われるのが、どれだけ嬉しいかね、ジャーナリスト達がね。よく解ります」

森永「（笑）」

水島「そこをねぇ、やっぱり森永さんは、だって審議員なんて引く手あまただったでしょう。

これだけテレビに出ているから」

森永「いや、でも、私は小泉構造改革を批判して、それまで結構、やっていたんですけど、全部、クビになったんです」

水島「あっ、そうだったんですか」

森永「実は日銀布教っていう本を出して、その一部で、今、審議員やっている野口旭さんも一部、書いているんですけども、それで７年間か８年間、日銀、出入り禁止になったんです」

水島「（失笑）」

森永「アベノミクスが始まって出禁解除になったんです」

水島「なるほど」

森永「うん。日銀に２～３回、行ったんですけど、今、また出禁になっている（笑）」

水島「（笑）」

田中「実は日銀布教っていうのは、所謂、リフレ派だとかアベノミクスの先駆になるような話をいち早く啓蒙書として書いて、帯を覚えていますよ。昔、陸軍、今、日銀みたいなね」

一同「（笑）」

田中「昔、関東軍だったかな、そんな帯でしたよね」

森永「あぁ、あぁ」

田中「えぇ。あれがないと、実は、僕の論壇デビューは無いんですよ」

水島「あぁ」

田中「その日銀布教は東洋経済でしたよね」

森永「はい」

田中「中山さんっていう編集者で。その中山さんが野口さんの書いたのも、もっと膨らまして本にしようと。その時に一人だと大変なので、じゃあ、田中が面白いことを言っているんで二人で一緒に書こうと。『構造改革論の誤解』は僕のデビュー作ですよ。だから森永さんが本を出さないと、僕はここに居ないんですよ」

森永「いやいや（笑）」

田中「だから、そういった意味では本当に恩を感じています」

森永「田中先生は、日銀に出禁にならなかったですか」

田中「出禁に決まっているじゃないですか」

森永「（笑）」

一同「（笑）」

田中「それでアベノミクスが始まって、初めて日銀に行って、あぁ、こういう所なんだ、俺は絶対にここで仕事が出来ないなと」

森永「（笑）」

田中「だからリフレ派の連中、岩田先生も含めて若竹さんとか、よく日銀なんて、僕は、脱サラ組ですから、つまり、しゃちこばった組織って絶対に合わないんですよ。日銀って言ったら、その頂点に居ますからね」

森永「うん。そうそう、そう」

田中「日銀なんて凄いですよ。秘書の人とか、もう１００メートル、２００メートル、その幹部用の出入り口があるんですよね。そこから、日銀の建物を曲がる迄、大体、直線で３０メートルから４０メートルぐらいあるんですけど、僕達の姿が、曲がって見えなくなるまで、ずぅっと出口で頭を下げているんですよね」

水島「そういうところか」

田中「これは僕が友達と日銀へ２回目に行った時に１回目の経験があったので、今、秘書の人はずっと頭を下げているけど、あれ、ずぅっと下げているよと。俺達が３０メートルぐらい歩いて行って曲がる迄、絶対に頭を下げているからって言ったら、友人はそんな訳ないだろうと言いましたけど、曲がる瞬間に見たら、やっぱり未だ頭を下げているんですよ。俺は、そんな社会、絶対に嫌だなぁと思って」

森永「（笑）」

田中「だから、よく、みんなねぇ、あんな所で人格崩壊しないで、リフレ派の連中は日銀に居たなと思いますよ」

水島「そういうのを嬉しがる奴も居るんだというね」

田中「嬉しがる、そういう人も居るかもしれないですけど、リフレ派はよくやったなぁってねぇ、もう絶対、あんな奴隷になるような所に行くまいと思いましてね」

森永「（笑）」

田中「もう脱サラ組ですから」

水島「あぁ～」

田中「もう恐ろしい組織です」

水島「なるほどねぇ。ただ、そういうのが今、実際、動かして、ただ、やっぱり、皆さん、ね、ジャーナリストって個人ですよね、最後には人間ですよね。組織は、どうしても、例えば毎日新聞だって経営が破綻してね、また、今、形を変えて再生したって言われているけども、やっぱり、今、どんどん紙媒体も駄目になっているし、それから、こういう流れになると、田村さんは、そういう経営に携わってないしょうけれど、新聞は殆ど、全部、部数を見ると落ちているでしょ」

田村「うん、それは落ちていますよね」

水島「ね。読まなくなっちゃっているっていうねぇ、ニューヨークタイムスなんか殆ど、今、

収入はデジタルの方になっているとか言いますから、そういう意味で、この本で、ねぇ、命がけで…」

田中「もう２０万部になっているのに、あまり新聞の書評がないですよね」

森永「それは、大手が全部、無視ですから」

田中「ですよね」

水島「黙っているんだよね、これね」

森永「あぁ、でも日経の夕刊に」

田中「え、載りました？」

森永「書評があったんですよ」

田中「へぇ～」

森永「それで笑っちゃうのは、前半に日本の忖度社会を批判した本であるとして書いてあって、中身はっていうところで日航１２３便だけ外しているんですね。それが忖度だということですよね（笑）」

水島「なるほど（微笑）いや、そうですよ、はい。これ、一応、読んでおきますね。『私がテレビやラジオなどメディアの仕事をするようになって四半世紀以上が経過した。その経験の中でメディアでは決して触れてはいけないタブーが３つ存在した。ジャニーズ性加害、財務省のカルト的財政緊縮主義、日本航空１２３便の墜落事件。この３つに関しては関係者の多くが知っているにも拘らず、本当のことを言ったら瞬時にメディアに出られなくなるという掟が存在する』全くその通りですね」

森永「大手テレビ局の報道情報番組、この数年で全部、降ろされました」

水島「あぁ」

森永「だから今、レギュラーはない。バラエティとか「がっちりマンデー！」はあるんですけど、政治経済に関係ない（笑）」

水島「怖くて出せないでしょうね（笑）」

森永「（笑）」

水島「特に生放送だったらね」

森永「あぁ、そうなんですかねぇ。まぁ、私は別にそんなに怖いものが無い」

一同「（笑）」

水島「いや、向こうが怖がっていますよ」

森永「（笑）」

水島「ただ、そういう怖がられるジャーナリストが本当に居なきゃいけないっていうかね、嘘つきは本当のことを言うことを一番、怖がりますからね。ただ、こういう中に戦後の７９

年、デフレが３０年続いて、空白になってきたっていうね。結構、こういう隠ぺいっていうのが現れていますね」

森永「そうそう、そうそう。このままいったら、もう近い将来、ＧＤＰランキング、ベスト１０から落ちるし、最終的にはミャンマーとか、カンボジアぐらいまで落ちてしまうのではないかって思っています」

水島「いやいや。でも、本当にリアルな話、そういう植民地化が本当に進んでいる。私も、大阪とか色んな所へ色んなところに行くんですけど、企業とか土地というものが、みんな、本当に買い取られていますね」

森永「うん」

水島「はい。それで色々ありますが、この間、川口のクルドの人達の問題が起きましたけど、やはり相変わらず治安は良くない。価値観が違うからぶつかるんですね。森永さん、これ、どうですか、少子化とか人口減少だから移民が必要という形でやっていますけど、まぁ、大体、今、ヨーロッパでスウェーデンとかドイツとか、ああいうのも、みんな反省し始めている。むやみな移民は拙いっていうね、この辺は少子化っていうのについては、森永さん、どう思われていますか」

森永「私は経済企画庁で働いていた時に、ドイツの移民担当の人が出張で来たんですよ。で、丁度、その頃から外国人労働者の受け入れをしようっていう機運が高まってきて、その時に、ドイツ人が何て言ったかって言うと『俺達が高度成長期にトルコ人とかを入れて、そのツケが今、とんでもない負担になっていて大失敗したのに、何故、日本はその悪夢の歴史を繰り返そうとするんだ。ただ日本人が苦しむ分には俺達、関係ないけどね』って言ってドイツに帰って行ったんです」

水島「じゃあ、それも随分前でしょう」

森永「随分、前です」

水島「日本は全然、改めなかったんですね」

森永「う～ん、もう、どんどん入れて、こんなの外国人一般労働者を入れたら賃金が下がるに決まっている訳ですよ」

水島「うん」

森永「岸田さん、賃金上げるって言っているのに、何故、賃金を下げる政策を執るんだという話です」

水島「はい。前半が終わりますので、最後に一言、戴いて休憩に入りたいと思います」

森永「はい。一応、個人的に闘う決意を固めたんで、来週ですね。今、耕作放棄地を借りて耕しているんですけども、そこに野菜を一通り植えて、１ヤード、３０坪あれば家族が食う分は全部、自給出来ます」

水島「おぉ」

森永「だから、電気と食い物を自分で作れば、この財務省の増税増負担路線と戦うことが出来ると。自分で食い物を作れば、消費税は取られない」

水島「うん」

森永「えぇ。これが私なりのレジスタンスです」

水島「そうですね。はい。貴重な最後のお言葉です。有難うございます。ということで体調の問題もありますので、森永さんは前半のここまでで退席です。本当に有難うございます」

森永「はい。有難うございました」

水島「大変、素晴らしいお話でした」

森永「どうも」

水島「一回、コマーシャルに入ります」

＜後半＞

水島「後半になりました。前半は本当に病を押して、ですね、ご出演を戴きました森永さんに敬意を表したいと思います。本当にああいう方がメディア、或いはジャーナリズムを支えて来てくれた。今も頑張っておられますけども、本当に敬意を表したいと思います。実は本当にお声をかけたら快く受けて下さって、ちょっと体力の問題で半分しか出られないけれどもということでしたので、こういう形でご出演戴きました。また出て戴く機会があることを、本当に望んでおります。

さぁ、ところで、もう一回、戻りますけど、日銀の利上げ路線だろうというのは、今日、ご出演の皆さんは殆どそういう構造になっていると。財務省は相変わらず緊縮財政論。こうなると（失笑）先程、冒頭、田村さんにおっしゃって戴いたガチガチの変わりようのない状態になっていく。益々不安定になって来ます。というのは、今、ウクライナもそうですけど、もっと言えば、イスラエルとイランの問題。中東に９５％ぐらい依存している我々のエネルギー政策、こういうものを含めて、世界が非常に予測がつかない不安定な状況になっています。

そういう中で、このような利上げ、そして金融緩和をやめたっていうことですよね。異次元の金融緩和と言われていたものが、もう、はっきり言って無くなる流れになっている。そして緊縮財政論で、もっと言えば、いつ、また消費税を上げるかもわからないと。どうするんだと。どんどん貧乏になって行くだけじゃないか。

じり貧でいいのかと。じり貧よりも、もっと言えば、戦争や地震や災害や色んな事が起きた時、対応出来ないんじゃないのかと。能登でも、この間、台湾の地震がありましたけど、実は台湾の機動的な運用っていうか復興についての動きと、能登半島という条件もあったんでしょうけども、それでも海に囲まれている訳で、日本の政府の対応が遅いという感じもしました。

こういうような形で、これから災害、戦争、色んなものが想定される。そして外国人の流入というのも含めて、このままでいいのかという感じですけど、田村さん、今の時点ですけど

も岸田内閣の経済政策は、このまま行ったら、どういう風になって来ますか」

田村「まぁ、これは当面、とにかく円で４万円支給とかね」

水島「はい」

田村「まぁ、だから、あれで、また家計の需要が持ち直すとか、そういう適当な事ばかりを言っていて、他方では子育て、じゃない何だ、あれで、あ～…」

水島「あれは腹立ちますね」

田村「あれで社会保険料が引き上げと、まぁ、事実上、あれは消費税の引き上げと」

水島「引き上げですよね。増税ですよね」

田村「まぁ、実質的に同じですよね」

水島「はい」

田村「しかも、更に現役世代を、また虐めるというね、これは何を考えているのだろうと」

水島「ほんと、そうなんです」

田村「これは、まさしく精神がおかしい（笑）」

一同「（笑）」

田村「何か思考回路が壊れちゃっていますよ」

水島「いやいや、そうなんです」

田村「うん」

水島「それもね、岸田さんだけじゃなくて日銀も財務省も、みんな一体化してね」

田村「うん、みんな、狂っていますね」

水島「ということでね、本当に笑い事じゃないですよね」

田村「不思議ですよ」

一同「（笑）」

水島「笑い事じゃないんだけど」

田村「不思議な国」

水島「本当にねぇ、おかしいと思わないんだろうかっていうね」

田村「うん。うん」

田中「もう、キチガイ来たぁ～みたいな感じで（笑）」

一同「（笑）」

水島「いやいや、いっちゃっている」

田中「子育て支援金って、もう経済学者、緊縮派だろうがリフレ派だろうが、全員、纏めて批判していますからね」

水島「そうだよね」

田中「まず色んな切り口がありますけれども、ともかくなぜあれを医療保険で取るんだっていうことですよね」

水島「そう」

田中「えぇ。しかも取り方が、消費税を社会保障目標に連動させたじゃないですか。だから、今、消費税を削減するとか廃止するなんていう主張をすると、そうしたら、社会保障制度が揺らぐみたいな言い方になっていて、それと同じ理屈が今後、出て来るんですよ」

水島「そう」

田中「子育て支援金の負担を削減するだとか、或いは、廃止して別なものにしようと言うと、今度、医療保険制度が揺らぐというので、もうアンタッチャブルになっちゃう訳ですよね」

水島「そうだよねぇ」

田中「更にあれですよね、あのう、もう何かいっぱい言いたいんですけど、今、頭がショートしちゃって、キチガイ来たぁ〜で、今、そっちの方がウケちゃって（笑）」

一同「（笑）」

田中「話が飛んじゃいますけど、ともかく何を考えているのか、まぁ、先程、前半で言ったリーク問題なんかもそうですし、筋違いの問題がいっぱいあって、あと、ちょっと何か田村さんの話を遮っちゃって申し訳ないんですけど、田村さんが前半に言っていた様に為替レート、特に円というものが今、投機の対象になってしまっていると。正にそうですよね。どうして、そうなったかって言うと、やっぱり植田日銀の特質ですよ」

水島「うん」

田中「つまりインフレ目標っていう金融政策の目標が、この１年間をかけて、とっくに形骸化しちゃっているんですよね。インフレ目標っていうのは、物価をただ単に引き上げるだけじゃなくて、経済状況を、例えば人々の購買力、可処分所得を増やした形で、経済を再起動して、それでリバウンドプルのインフレ状態にもっていこうというものですよね。それを事実上、まぁ、やめた訳ですよ。大胆な金融緩和をやめただけではなくて、それと同時に正統的な我々の国民生活を改善するっていう目的を放棄した訳ですね。

そうすると目標が無いですから、日銀の政策が漂流し出すんですよね。その典型が表れているのは円の投機対象で、もうビルトインされていると。正にそうだと思いますね。今、１ドル１５５円をターゲットにして投機筋と財務省日銀軍団が睨み合っている訳ですよ。ハッキリ言って馬鹿みたいですよ。投機集団と一国の政府機関が対峙しているんですよね。

これって異常な事態ですよね。未だ固定化為替レート制を守るっていう意味だったら解るんだけど、それを変動為替レート制でやっている訳ですよね。正に、お前ら、何をやっているんだっていう感じですよね」

水島「ほんとですねぇ」

田中「それで株。日経平均、凄くブレますよねぇ。これはダウ平均と連動していますけど、大体ダウ平均が下がると、その１．５倍から、まぁ、今日なんか３倍ぐらいの振れ幅で変動するんですよ。これも結局は資産市場に、この金融政策の筋の基本が無くなっちゃったんで、株価まで漂流し始めているんですよね。

だから資産市場、為替レートも株価も、その内、国債の金利なんかも含めて、これは乱高下すると思うんですよね。それは、やがて実体経済にも及んで来ると」

水島「そうですねぇ」

田中「えぇ。これが最悪のシナリオですね。金融をおかしくして実体経済にその影響が及ぶと。これは、規模こそ違えど、自国内発のリーマンショックみたいな感じですから」

水島「いやいや。そういう可能性はあるよね」

田中「えぇ」

水島「ねぇ」

田中「我々は、それを９０年代の初めにやっている訳ですよ。それでリフレ派って言うと、何かデフレ脱却ばかり言っていますけど、リフレ派って元々出て来たのはバブル経済が何故、生まれて、何故、崩壊したのかっていう、その問題意識で出ているんですね。つまり、インフレ経済の時に日銀の政策がおかしいって言って出て来ている訳ですよ。その延長でデフレ脱却っていう話が出ているので、正に今はその始めの位置に戻った訳ですね」

水島「うん」

田中「日銀も戻っちゃった訳ですよ」

水島「うん」

田中「更に全体が昔よりも取り繕うこともしないですよね。キチガイ来たぁ～っていう話ですから。もうキチガイって、ここしか言えないですけどね。ラジオでは言えませんから、言わせて戴きたいと思いますけど（笑）」

一同「（笑）」

田中「ほんと、おかしいと思いますよ」

水島「いや、本当に狂った話ですよ」

田中「えぇえぇ」

水島「それが公然と今、続いて来ているっていうね。みんな、理屈を言われると、その通りでね。そんなことが解らないのっていうねぇ。これが恐ろしいことだと思うんですけどね。あんどうさん、どうですか、この政策の流れが続いていくと、良い事が、ひとつも無いっていうねぇ」

あんどう「まぁ、ほんとに、いい事がひとつも無いですけど、この今の円安で、また一部の国会議員が、いよいよ通貨危機が来たとか言って（失笑）騒いでいる人も居たりするんですけど」

一同「(笑)」

あんどう「いや、落ち着けと。そんな状況じゃないからと（笑）だから、そういうところで踊らされたら駄目ですよと。やっぱり日本が今、やらなきゃいけないのは日本経済をちゃんと落ち着いて立て直すことだと。その為に一番、最適なのは消費税減税だと思うんですけれども、ちょっと面白いデータがあるんです」

水島「はい」

あんどう「賃金構造基本統計調査、これ、３月に公表になっている去年の実績ですが、賃上げされていますよっていうのは今、岸田内閣でどんどんやっているじゃないですか」

水島「宣伝されていますね」

あんどう「もう３０年ぶりの賃上げが実現できたぁ～とか言っているんですけれども…」

水島「うん、５％上がっているとかねぇ」

あんどう「面白いのが大企業の中堅どころの賃金は下がっているんですよ」

水島「あぁ」

あんどう「３５歳から３９歳がマイナス２．１％、４０歳から４４歳がマイナス０．６％」

水島「下がっているんですか」

あんどう「下がっているんですよ」

水島「うん」

あんどう「４５歳から４９歳がマイナス１．３％、５０歳から５４歳がマイナス１．２％ということで…」

水島「おぉ～」

あんどう「大企業の中堅どころの賃金が軒並み下がっているっていうのが起きているんです」

水島「ということは、中堅どころから上以上の給料は下げて、若い方にちょっと持って行っているっていう感じなんですか」

あんどう「そう。そういうことです」

水島「あぁ…」

あんどう「だから今、賃上げが起きているって言っているけども、それは確かに若い世代は賃金が上がっているかもしれないけれども、もう３０代から上は賃下げが起きていると」

水島「なるほどねぇ」

あんどう「大企業では」

水島「う～ん」

あんどう「それは役職定年とか、或いは、この賃金の規則を変えて、確かに見た目は賃金が

上がっているっていう風になっているけれども、実は色んな手当を削るとか、働き方改革を規則に入れ込んで働いても残業が付かないようにするとか」

水島「あぁ、なるほどねぇ」

あんどう「まぁ、そんなことをやって賃下げを起こしているっていうのが、このデータから明らかですね」

水島「なるほど」

あんどう「なので多分、今年も同じことが起きるんじゃないかと。確かに小企業とか中企業の賃上げは実際に起きているんだけれども、大企業が率先して、そういうところの賃下げを始めている。だから、これは恐らく色んなところに影響がしてくると思うので、正に、就職氷河期世代ですよ」

水島「そうですね」

あんどう「うん。就職氷河期世代は就職の時に苦労し、今迄、本当に低賃金で働かされて、やっと賃金が上がってきたかなと思ったら、今度、賃下げに遭う訳ですよ。本当に悲惨な目に遭っている世代がまた出て来ているっていうのは、このデータを見ると明らかだと思うんですね。これは、正に日銀が金融政策を転換した頃に公表されているデータですけれど、一体、日銀は何を見ているんだっていう話ですよね」

水島「そうですよね。だから実感がね、ニュースとかああいうのは、もう５％、連合とのあれで上げましたとか言っているけど、一方で日産が公取から勧告を受けた３６社の下請けに３０億円、削れと」

あんどう「はい、はい」

水島「そういったような感じのイメージがね、やっぱり、そっちの方がリアルな感じがしてね。それから中小企業も上がったって言っても、価格とか色んなものに転嫁でき難いっていうね」

あんどう「だから、あげられているのは、やっぱり極めて一部であって…」

水島「そうですよ」

あんどう「連合に入っているところは確かに連合が頑張れって言っているから上げているとは思いますけども、連合に入っていない企業の方が圧倒的に多い訳ですから、そんなところは上げられるはずがないと。で、未だゼロゼロ融資の返済とかで苦しんでいる所もいっぱいあるので」

水島「いや、そうですよ」

あんどう「とてもじゃないけれど、日本経済が賃金と物価の好循環が始まっているなんて、何処の世界の話ですかっていう話ですよ」

水島「いや、本当に、さっき狂っているっていうね、頭がおかしいんじゃないかっていうの、このぐらい、まぁ、私は経済の専門家じゃないけど、そのぐらいは本当に解るからね」

あんどう「そう」

水島「実感としても解るしねぇ」

田村「まぁねぇ、植田さんは、国会と言うかねぇ、９日にも参議院なんかで色々喋っても、要するに賃金と物価の好循環なんていうことも『見込み』ということばかり言っているんだよね。だけど日銀総裁っていうのはねぇ、古い日銀総裁だったら絶対に、そんな言葉づかいはしないはずだけどね（失笑）」

水島「うん」

田村「何かねぇ、やっぱり、おかしいですよね。『見込み』って、要するに何の根拠も無しにって言うか何か新聞に出ているような。この連合の発表とか、そういう数字だけで、まぁ、要するにフィーリングでものを言っているだけですよね」

水島「そうですねぇ」

あんどう「だから日銀政策決定会合でも二人だけ反対していましたよね」

田村「うん」

あんどう「だから、あれは、やっぱり真面で…」

田村「あれは真面でねぇ、あの人達」

あんどう「ちゃんと実態を見てからやらなきゃいけないよって」

田村「日立出身の中村さんとかねぇ、うん」

あんどう「そう二人だけですか、みたいな」

田中「中村委員は起業家の実感として慎重姿勢で、野口さんは、アベノミクス、つまり大胆な金融緩和をやめる政策と整合的じゃないと。つまりインフレ目標を安定的に達成してない経済は安定化していないと、その証拠が無いのに何で政策転換するのかと。政策の転換の不連続性で反対しているんですよね。まぁ、情けないのはリフレ派だった、もう過去形ですけど、安達誠司ですよね」

一同「うん」

田中「彼は賛成しちゃっていて、もう安達委員は変調をきたしているって、僕ねぇ、２年ぐらい前に言っているんですよ。だから僕のフェイスブックが昔は、相互フォローだったんですけど、彼は僕が批判し始めたからブロックしたんです。だから２年前に変調を感じたんですね。なんか日銀っぽくなっちゃったなぁと。それをボロッと言っちゃったんですよ。それでカチンと来ちゃったらしいんだけど、今ね、公然の事実ですから、彼は賛成しましたからね。

野口さんは、もし政策転換を今、したら、恐らく反対するだろうと。案の定、しましたよね。今後はどうなるのかっていうことですよね。二人だけで、ずっと反対し続けるのか、まぁ、それはそれで面白いですけど、まぁねぇ、多勢に無勢ですから」

水島「まぁ、そうだね」

田中「結局は、今の利上げ路線を内部から変えるっていうことは出来ないので、本当に政治側から変えないと、先程、森永さんが言ったように、植田さんは人たらしっていうことは、

人の事を見ているっていう訳ですよね。つまり政治が変われば恐らく変わりますよね。だから岸田さんじゃなくて、やっぱり金融政策を、しっかり解っている総理大臣に替える以外に、政策の変化っていうのは求められないですよね」

水島「うん。そうね」

田中「その政治家が今、与党の中に実力者として誰が居るかっていう話になると思うんですよね。まぁ、少なくともテレビの世論調査でね、小石川連合でないことだけは保証付きでけどね。だからそれ以外の人に求めるしかないと」

水島「うん」

田中「ただ、それが本当になるのかと。もう、はたから言っても、岸田さんはひょっとしたら、また総裁選に出兼ねないような雰囲気ですから」

水島「いやいや、あの面の皮だとやり兼ねないですよ」

田中「はい。えぇ。もう史上最強のキチガイ来たぁ～みたいな話ですからね。だって、おかしいですからね」

水島「いや、もう…」

田中「普通だったら出られない訳じゃないですか」

水島「うん」

田中「だけど出そうな雰囲気があって怖いですよね」

水島「いや、だからねぇ、つまり、怖いのは、彼はアメリカの、ちゃんとバックアップがあるからね。もう国民に支持されなくても大丈夫と。あのバイデンの言うことさえ聞いていれば何とかなると思っている節があるんでね」

田中「えぇ…」

水島「それから、やっぱり今回の安倍派の解体、裏金問題っていうのは、勿論、ＣＩＡとか東京地検に情報を与えてやったと、私なんかは思っているんです。その怖さは、この間、長尾さんが来て言っていたけど、やっぱり、みんな、震えあがっている。その問題、下半身とかね、ここまで俺達は掴まれているんだというようなことは、やっぱりあるけれども、やっぱり、そういうものをそれこそジャーナリストじゃないけど、そんなの、もう女だろうと金だろうと謝りゃいいんだからね、もし、戦う奴が居るかって言ったら、今、誰も居ないですね。

だから２０％って言ったら少なくても５人や１０人は、岸田、もう辞めたらどうだって言う奴が国会議員から出てもいいはずなんですよ。今、一人も居ないのね。これ、ビックリしますよ。だから、これぐらい異常な状態の自民党になっているって。それで補選の結果がどうたらこうたらって、違うだろうと、今、国民は、このオジサンを支持していないよと言っているのにも拘らず、そういう状態ですよね。経済が今、聞いたように、そのまま行きそうだと。ということは、室伏さん」

室伏「はい」

水島「我々はどうなっていきますか」

室伏「いや、もう、だから今のまま進んで行ったら、先程の話もありましたけどね、ミャンマーとか何とかってありましたけど、直近、この１０年ぐらいで言えば多分、インドネシアよりも後進国になると思いますよ」

水島「そうですね」

室伏「だから東アジアで何か、昔は先進国だったらしいよっていうね」

水島「うん」

室伏「要は、東南アジアの、それこそインドネシアとかタイとか、あの連中が日本人よりも賃金がいいからって言って、日本に遊びに来て、だから、昔、日本が出来ていたようなことを日本でやられると。日本人も子供達も、みんな、そういう人達のお金にすがるようになるっていう物乞い状態になって、だから精神が荒んでいくっていうことで、完全に日本という国が、どんどん崩壊していって、その内、あれじゃないですか。正に円がどうこう言っている何かハイパーとか言う人が居ますけど、それこそ日本で円を使うより、ドルを使った方がいいとかね、人民元を使った方がいいとかっていうことになっちゃいますね」

水島「何か外国の方が凄いですよね」

室伏「だから、今、やっていることっていうのは、かつて僕らが旅行に行った先の東南アジアとかで経験していたことが進んでいるっていうことだし、それに関して大手メディアっていうのは、ちゃんと解説をする役割をしなきゃいけないんですけど、それをやっていない。これは一つの典型的な例として、金融緩和との関連でお話ししますけど。よく海外に行くとね、高いと。それから日本に輸入品が高くなったって言って、その時に皆さん、全員が言うのは金融緩和が悪いと。金融緩和で金利が低いというかゼロだからと、マイナス金利だからと、だから、どんどん為替レートが円安になっていって、その結果として、僕達、私達は損をしているんだという話をして、必ず大手メディアだと、例えば観光客インバウンドが来ますと」

水島「うん」

室伏「円安で日本は安い。こんなに安く買えるんだ、嬉しいっていう風に言うんですけど、まず輸入品から考えるとね、まず、こういうことじゃないですか。大手メディアの説明は、こうですよ。だけど、もう、そもそも向こうがねぇ、ディマンドプル・インフレで昔、この価格で買えたものが今、もう、この価格になっている。それは日本に持って来るのに、まぁ、輸送コストとかエネルギーコストとか一番、最後に為替は乗っかるもので為替ゼロとは言いませんけど、ってことじゃないですか。でも、こういう説明を一切しないで全部、金融緩和が悪いと」

水島「うん」

室伏「じゃあ、日本でね、日本の方は無いんですけど、じゃあ、日本で何故、安いんですかと言ったら、それはデフレ放置しているからですよね。コストプッシュ・インフレでデータ上ではインフレになっているけども、中身としては先程、申し上げたようにデフレですと」

水島「うん、そうですよ」

室伏「これを放置して、皆さんが物を買えないから、結局、企業としては安くせざるを得ないから人件費をカットして安くするっていうことなので、だから日本だと日本人にとっても安いと」

水島「うん」

室伏「だって下手すれば、私が大学に入った時って、丁度、大学に居た時にバブルが完全に崩壊したんですけど、それからバリューセットって言って、昔、マックが千円ぐらいしていたのが５００円とかになって、しまいにはハンバーガー一個、７０円とか８０円とかになったじゃないですか」

水島「一時、そういうのがありましたね」

室伏「えぇ。でも、今、そのね、要は生産コストというか原料コストが上がって、又、戻っていますけど、その頃から、あんまり変わっていない。場合によっては、その大学１年の時にマックへ行っても千円払うのは嫌、まぁ、嫌だなぁと思った頃より、安い状態で買える。これ、おかしいでしょうっていうことを考えなきゃいけないんですよ」

水島「うん」

室伏「でも、結局、この３０年間、安いのはいいよねと。安いからいいよねっていうマインドが沁み付けられちゃったし、確かに、そういうのが、特にバラエティ番組とか情報番組で、安い所、お得な所って紹介して、ここ行けば安い。スーパーもチラシで今日の目玉品、まぁ、それを誘因にして他のものも買わせる訳ですけど、そういうことをやっているから、まぁ、それはそれでいいんですけど、結局、みんな、安いことがいいんだっていうマインドが付いちゃって、しかもデフレを放置するようなことをやって、デフレからの脱却っていう話をしていたのに、デフレから脱却するような政策を全く何もしないと」

水島「うん」

室伏「だって海外からのものが　要は原料価格とかね、資源価格が高いんだったら日本国内に投資をして食糧を作りましょう、原発再稼働しましょう、まぁ、安全対策が必要。解りました、その分は国がお金を出しましょうとかいうことをやって、それによって、雇用も生まれるし、そこで働いている方々の賃金も上がるしというところで、そうやって需要を高めて行くし、国内で海外の物価とか海外事情に影響されないような形で、安定的に国民が苦しまないようにするって、これが当たり前の運営ですよね」

水島「うん」

室伏「だって、今、食糧なんて言ったら、サウジアラビアとかアラビア半島の国って日本人だと砂漠のイメージですけど、あそこは今、食糧自給率向上を、凄くやっきになっていて、サウジなんてあのイメージの所ですよ。自給率１００％にしようとしているんですよ。でも日本って自給率をどんどん下げて…」

水島「そうなんです」

室伏「それがいいって言うし、あとは、その食糧農業、農村基本法改正案、あれは、完全に日本の農業を植民地農業にして海外に頼らざるを得ないようにしようとしていると」

あんどう「輸出で農業再生とかって言っていますね」

室伏「そうそう」

あんどう「意味不明ですよね」

水島「本当に馬鹿みたいなねぇ」

室伏「いや、僕の知っている元農水官僚の国会議員が、輸出でやっていいものは海外が買ってくれるから、そうすれば、これからの農業は持続可能になるんだって言うんですけど、いや、海外の経済なんて景気がいいのか判らないから景気が悪くなったら買ってくれないかもしれないし、申し訳ないですけど、リンゴとか苺とか、僕は好きだからいいんですけど、あれを食べられなくたって生きていける訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「じゃあ、もう、うちの国もこんな経済状態で要りません、誰も買いませんってなったらどうするんですかって言ったら、それに頼らされた日本の農業って壊滅ですよ」

水島「本当にその通りですよ」

室伏「だから何をしているの、君達はっていう話ですけど、事程左様に他の政策でも海外頼みだったりとか、要は人口が減ることが前提だったりとか、デジタルにすればいいって言って他の手続きをやらない。でも、その一方でデジタルは物凄く電気を食うのに電力については何もしなくて、自然エネルギーだとかＧＸとか馬鹿なことを言っている訳じゃないですか。もう、やっていることがハチャメチャっていうか、先程、キチガイ来たっておっしゃっていましたけど、今、本当に精神分裂症とかね、頭が何かバラバラになっているんじゃないかっていうぐらいの状態ですよね（苦笑）」

水島「そう、全くそうですね」

田中「そうですね。だからエネルギー基本計画だって、２０３０年に５０％超をＣＯ２削減みたいな目標を立てて、でも、あれって小泉ちん次郎っていう進次郎の親戚が大臣だった時に作ったものですけど、あれってベースになる減り方っていうのは経済が停滞したっていう前提で作っちゃっていますので、勿論、経済が復興すると皺寄せが何処かに行く訳ですね。

例えば、民間が実現できないような省令に邁進するとか、再生エネルギーに、もっと全振りするとかね、そういう風にしないと達成できない訳ですよ。当然、達成は出来ない訳ですから、でも、それなのに今日の日経新聞の朝刊を見ると、それを無理めなエネルギー基本計画の上に、更に２０４０年を目指した新たな基本計画を立てなきゃいけませんって。だからキチガイ来たぁ～の基本計画の上に、更に、また変なものを重ねるっていう、もう大丈夫かよと」

水島「いやいや、本当にそう思っているね」

田中「ほんとね、大変ですよ。大学とか今、前期後期制に欧米に合わせちゃっていますよね。だから授業数が増えているんですよ。昔、皆さんが、まぁ、室伏さんは違うと思いますけれども、大体、年間２５コマでしたよ。今は前期後期、３０コマですね」

水島「あぁ～」

田中「だから長いんですよ。長い所を何処でやっているかっていうと、夏休みを削っている

訳です」

水島「あぁ」

田中「だから凄く暑いんですよ」

水島「うん」

田中「それで温度設定なんかを一律２５℃。でも教室で２５℃って言ってもね、暑い所、僕の立っている所なんて３０℃近くになる時もあるんですよ。それで無理やりやっている訳ですよね。実現できないような省令で、みんなの健康を壊しながらやっている訳ですよ。だから、そういった何ていうかねぇ、何の為にと」

水島「うん」

田中「国民の健康や福祉を増進する為にやっているんじゃなくて、もう何か数値ありきで」

水島「そうだね」

田中「それは変えることが出来ませんっていう話ですよね」

水島「全くそうだねぇ」

田中「えぇ。だから日本国憲法九条並みのものが今、日本にいっぱい出来ている訳ですよ。消費税は微塵も減税できないと」

水島「うん」

田中「ね。エネルギー基本計画をどう見たって、国際情勢から言っても無理矢理なものなので、これは、どうにか今でも修正しなきゃいけないのに、これも変えることは出来ませんと。国際公約だからみたいなね。ハッキリ言って、誰もそんなの気にしていませんからね。ヨーロッパ自身が守っていないから。だから、そうは言ってもね、何か変なものがいっぱい増えちゃっていますよね。だから子育て支援金なんかも、やがて同じような扱いになるんじゃないですか。全く」

水島「だから、本当にイデオロギーっていうかね、そういうもの、まぁ、脱炭素もそうなんだけど、こういうものを優先させちゃって、現実の人の命とか生活を全く見ていない経済の運営みたいなことをやって、それこそ気が狂っているとしか思えないみたいなことなんだけども。それと、もう一つは、やっぱり我々がこの中で感じるのは、外資をとにかく導入するっていうことをやっているじゃないですか。

我々が実態経済として、例えば昔、５０年前、さっき言ったバブルの前までは、日本に生産拠点があって、円安になっても、それは逆に輸出が便利になるからいいとか、そういう論理で言っていた訳だけど。今、その生産拠点そのものも出来なくなる。

一つの例で言えば、ホンダのオデッセイですか。あとレジェンド。これは結構、いい車で、この日本国内の生産はやめましたよね。ホンダはね。それは何故かと言ったら半導体が真面に来ないから。それで中国へ持って行っちゃう。もう一つ言うと、テスラも今、そうですけど、ＥＶ車って、これは知っていたら逆に聞きたいんだけど、みんな、やめ始めているじゃないですか。ところが日本だけが未だＥＶ、ＥＶって言って、１周、２周遅れのトップランナーみたいなことをやっている訳ですよ。つまり、聞いたらガスの問題だと。ＥＶは非常に

火が点き易いとかね。構造は簡単でモーターを付けるだけだから、ところが車のエンジンっていうのは凄く技術とかが要るから、やっぱり、そういう意味ではハイブリッド車が一番いいっていう流れになっているのに、我々の国だけはＥＶ車にお金を出すっていうね。

だから、もう本当にねぇ、生産国ってね、我々の国が、ある意味で、色んな種類はあるけど、生産するっていうことを全部、やめようとしているっていうね。さっき言ったように、やるとしたら、昔、植民地のマレーシアがゴムと錫とかね、フィリピンはバナナとか、何か売れる農産物っていうものを集中的に作りましょう、みたいなね。そういう状態になりつつあるというのは北海道を見ていると、本当にそういうのがあるんですよ」

室伏「あとは恐らく国際的なバリューチェーンに対する性善説というか、とにかくアメリカ様が居てくれるから、安全を守ってくれるから、海外に生産拠点を持って行っても大丈夫と」

水島「うん」

室伏「コロナの時に、本当に、こいつらの頭がおかしいと思ったのが、まぁ、中国が、ああいうことになりましたといった時に、あの当時の政府が何をやったかって言うと、生産拠点を東南アジアに移すって言ったんですよ。いや、普通、国内回帰だろと思うんですけど」

水島「そうなんだよ」

室伏「だからねぇ、もう完全に何だろうなぁ、ある意味、平和ボケだろうと思いますけど」

水島「う～ん…」

室伏「だから平和ボケっていうことは、即ち根底に国家戦略だとか、国の本当の国防安全保障ということを考えることは出来ないと。自国の事は自国で守らなきゃいけないから、その為には何が必要かっていうことをブレイクダウンしていったら当然、生産拠点の話とか食糧っていう戦略物資はどうしようとか、子供達をどうしようとかって考えるじゃないですか」

水島「そうですよ」

室伏「インフラをどうしましょうっていうことになって…」

水島「うん。それは、より大事ですもんね」

室伏「インフラは、もう規制しつつあるとか、何処の惑星の話かよく判んないこと書くわけがないですよ」

水島「うん」

室伏「あの頭のおかしい財政制度等審議会でもね、本当だったらね。でも、それを書いているっていうことは、完全に平和ボケって言うか、少し脳みそが溶けているんだと思います、あの人達」

水島「う～ん。だから一番の問題は段々浮き上がって来たのは、所謂、エリートと言われる、そういう層が、実は物凄くレベルが低下して…」

室伏「そうですね」

水島「世界の中で、う～ん、だから、やっぱり、台湾とか韓国、特に韓国は、もう５年前ぐらいに年収が追い抜いた訳でしょ。それで今、再来年にインドがＧＤＰを追い抜く。その３

～４年後にインドネシアが今度、日本を追い抜く」

室伏「はい、はい。えぇ」

水島「こういうような状態なのに、この日本の中にエリートっていうのは本当に居なくなっているんですかねぇ。真面に戦略的に考える、今、聞いたら、皆さんの意見が一致しているのは、何を考えているか解んないと。ただ今のままでの通りのことだけで、経済政策が続いている。

それと、もう一つ、ちょっと聞きたいのは、今、戦争の危機って、正直、あると思っているんですよ。エネルギーのね。まずイランとイスラエルの事を考えれば、これで、また、先程、言ったように、非常にイスラエルの防空壕、アイアンドームっていうのは、実は、あまり、あまりって言うか殆ど報道されていませんけど、ズタズタだと。いつでも、もう破壊できるっていうことが判っちゃった。そういうイランの物凄い力というのがバレてしまった。

イランは黙っているけども『時間は自分の味方だ。いずれ核兵器も持つし、イスラエルは消滅するかも分からない』というね、というところまであると、もう中東で一番、影響を受けるのは、我々じゃないですか。アメリカは自分のを持っているし、ロシアはそうだし、我々の国だけなのに、災害もそうなんですけど、これは、じゃあ、田中さん」

田中「はい」

水島「そういう経験から言って災害とか戦争に対応できるシステムって、経済も政治も出来ていますか」

田中「いや、出来てないっすよねぇ（苦笑）」

水島「全く出来てないでしょ」

田中「えぇ。だから今のところは石油価格の市場は、まぁ、落ち着いているんですよ。むしろ、ちょっと低下も何かしちゃっているんですが、でも、それって今のこのミサイル攻撃を受けた状況で、実は年初来から石油価格って緩やかに上がっているんですよね。大体、今、１バレル８５ドルぐらいですか」

水島「うん」

田中「その水準というのは、去年のピークとほぼ変わらないんですよね。これは、もう、それを超えて行くと、やはり我々の、例えば物価にも大体、原油価格が１０％上がると、まぁ、色んな前提がありますけれども、まぁ、消費財価格が大体、確か０．３％ぐらい上がるんですよ。だから１５％原油価格が今、年初来から上がっていますから、そうすると大体、最終財の価格が０．４５％ぐらい上がっていくということですね。

それで、もし、本当に戦争状態みたいになってしまうと、当然、１ドル９０ドル台なんか超えていって、ウクライナ戦争勃発時みたいな１バレル１２０ドルぐらいになると思うんですよね。そうなると、また物価が、かなり高騰すると。その時に日銀と財務省がどんな対応をするかと言うと、恐らく自分達は努力して、自分達、彼らの発想ですよ。せっかく大胆な金融緩和をやめたと。金利の正常化を成し遂げたと。それを景気が悪いからと言って、おいそれと、また大胆な金融緩和をやるっていうのは自分達の敗北を認めるってことですから」

水島「まぁ、そうだよね」

田中「えぇ。それの経験は、我々、直近でしている訳ですよ。あの２００６年の時の量的緩和とゼロ金利の解除をやったんですよね。その時も、我々は批判したんですよ。今、デフレ脱却していないのに、何故、金融緩和を止めるんだと。これは日本経済脆弱したままやめることになるので、何か外部ショックあったら凄く経済が落ち込むと。正にリーマンショックでそうですね」

水島「そのまま、そうなったねぇ」

田中「えぇ。だから似たような状況になって来ると思いますね。政策の転換が遅い。つまり自分達が行った今回の政策転換の果実を捨てたくないんですよね」

水島「うん」

田中「そういうことになって来ると思いますね。この戦争が、もし本当に勃発しちゃうと、日本経済は政策面で、かなり窮地に追い込まれると思いますね」

水島「そういう戦争の危険も、実はあるというね、これは他の討論でもやっていますけどね、アメリカ軍の海兵隊の実働部隊は、もうアジアに居ませんから、朝鮮半島にも嘉手納基地にも居ない。いざとなったら来るというね、それで来援するっていう形になっていますから、実際、戦うのはウクライナと同じようにアメリカの武器や何だか一応、供与というか売るけども、援助するけれども、戦うのは日本人、日本の自衛隊、或いは、韓国兵というような形になるっていうね。

これは明らかな話で、それから尖閣諸島でやれば、ＣＳＩＳっていうシンクタンクが言っている様に、一日で日本の自衛隊、護衛艦は全滅すると。航空自衛隊の格納庫が地下に無いですから。それでも日本には戦って貰うと。でも自衛隊の元陸将や空将の人達の話を聞けば、本格的に助けに来るとしたら最低２～３か月はかかる。今のまま機材は嘉手納とかありますけど、人は居ないと。

だから、もう一つは今回、その運用として馬鹿な保守が言っているのは『日米が緊密化している』って、違うって。司令部がアメリカになって雇い兵として戦って血を流すのは、日本の自衛隊。こういう構造が、きっちり出来た。アメリカの雇い兵になるんだというね。その戦場は何処だって言ったら日本だと。

こういうようなことがあるのと、もう一つは戦争もそうですけど、田村さんね、もう一つは、もし東京に直下型の地震があったら、もう立ち直れないぐらいって言われていますよねぇ」

田村「まぁ、これはねぇ、地震と富士山の爆発とか、これは覚悟しなきゃいけないですね」

水島「いつか必ずありますからね」

田村「うん」

水島「それでね、ただ、そういうのに対して、戦争に対してはシェルターも無いし、少なくとも戦闘機とか、ああいうのは、みんな、地下に、アメリカ軍はやっているんですよ、嘉手納でもね。表に飛行機を見せていますけど、いざとなったら地下の格納庫、それから嘉手納の三分の一以上、半分以上だ。弾薬庫ってあるんですよ」

田村「うん」

水島「意外と知られていないですけど、これは全部、地下ですよ。上は森になっている。全く分からない。それで出入りも出来ない。日本の人達もよっぽどの関係者以外は全部、出入りが出来ない。だから、ここに核兵器が置いてあったというね、今、置いてあるか分かりませんけど、そういうぐらいの所があって、さっき森永さんが言ってくれたのかな、横田の上空とかね、ああいうのも全然、役に立たない。実態は本当に、もう我々の国は、自衛隊は、護衛艦は、自衛するのはアメリカ軍を守るというね、戦場を今回、ついに極東に持って来たって。

だから、そういう意味で言うと、この災害と同じように見た時、我々は、もう対応が出来なくなっているっていうね。これ、本当にいいのかなっていうね。ということですけれども、そうなっているけど（失笑）変える要素が全然、出来ていない。もう何か痛い目に遭わないと駄目ですかね。ドラスティックに何か…」

田村「まぁ、在外資産で、金融資産で８００兆円はありますからね」

水島「うん」

田村「何かあった時は、それを強制的に本国に送金させるぐらいの法体系を作っておかなきゃ、法律をね」

水島「そうなんです。ところがね」

田村「うんうん」

水島「日本の政府は馬鹿なことに、ウクライナの連帯保証人をやっているでしょ。それで、もう一つはロシアの資産を凍結しろと言っている訳。あれはね、何か戦争になったら日本が悪いからと言って、凍結されて奪われる可能性もある訳ですよね。よっぽど平和な時以外はね。だから手の打ちようが無いっていう感じが、田村さん…」

田村「うん」

水島「どうしたらいいですか（苦笑）」

田村「いや、だから在外金融資産をね、要するに本国に回収させるっていうね」

水島「うん」

田村「そういうことでも、ちゃんと言っておけばね、少なくとも円の暴落は避けられます」

水島「あぁ、なるほど」

田村「うん」

水島「最低でも、それやりたいですね」

田村「いや、それをやらなきゃいけない」

水島「うん。まぁ、ちょっと、そういう資産」

田村「うん」

水島「それで、あんどうさん、何か具体的な決定版じゃなくてもいいから」

あんどう「（苦笑）」

水島「一個、一個、やっていくとなると何がありますか」

あんどう「対策するのは、はっきり言って、もう、今の、今日の話じゃないですけど、エリートが完全に頭がおかしくなっているんで」

水島「うん、そうですよねぇ」

あんどう「そこを本当にみんなが認識しなきゃいけないと思うんですけど、それで、ちょっと言おうと思ったのは、消費税の増税プログラムが、もう始まっていると思うんですよ」

水島「これが、また良くないね」

あんどう「これが東京財団政策研究所が政策提言で出しているんですけれど『多様な国民に受け入れられる財政再建・社会保障制度改革の在り方』、もう、これ、要するに消費税増税は、どうしたら出来るのかっていうのを研究して発表しているんですね」

水島「なるほど」

あんどう「そうすると『国民の多くが、経済学者と同様、現在の日本の累積する公的債務について強い懸念を持っており、このままでは厳しい財政再建が必要となると考えていることが明らかとなった』と。なので『財政再建の必要性という方向性については、国民の受容度は高いように思われる』と。だから、もう世界とか関係無いですよ。今は、とにかく消費税増税だっていうところに走っています」

水島「まぁねぇ、うん。（溜息）」

あんどう「『国民は消費税増税に対して、非常にネガティブな意識を持っている』」

水島「うん」

あんどう「だけど、『特に消費税増税に対して「岩盤的」な反発や財政緊縮策における増税に比した歳出削減への国民の強い嗜好』があるとなっているんですね。だから、とにかく、財政再建するには消費税増税は難しいけれども歳出削減と一緒にやっていけと」

水島「なるほど」

あんどう「そういう話になっていて、これでズラズラと、こういう提言が纏まっているんですけれど、だから今の世界で戦争が起きるとか、或いは、このエネルギー政策が変わっていてもＥＶじゃなくて、現実的な方に世界は変わっているとか、もう、そんなの関係ないんですよ」

水島「うんうん、うんうん」

あんどう「もう、そうじゃなくって、この人達は、とにかく消費税増税するには、どうしたらいいかっていうことに邁進していて、この東京財団っていうところは財務省の御用財団みたいなところですから、そこの息のかかった学者達が、こういうことを一生懸命、考えて、今、令和臨調っていうのが出来ていますね」

水島「あぁ、そうなんですか」

あんどう「令和臨調っていう民間の経営者とか、そういう人達が中心となって、財政再建をやらなきゃいけないっていうグループが出来ていて、そこに、呼応するように超党派の議員連盟が出来ている訳ですよ」

水島「うん」

あんどう「なので、もう岸田さんが『景気は良くなっています』。さっきのあれじゃないけれど、『デフレ脱却宣言をやります』と。それで日銀も『景気良くなっています。物価と賃金の好循環が始まっています』って、そういうストーリーを作っていって…」

一同「(笑)」

あんどう「もう景気は良くなっているやんかと。ゾンビ企業は潰れていけ、ですよ」

水島「なるほど」

あんどう「ゾンビ企業は潰れていって、出来るだけ中堅の企業にみんな集約していったら経済が成長するはずだっていう、そういうシナリオを今、描いていますから。この人達は、世界がどうとか、日本の食糧危機がどうとか、エネルギー危機とか、もう眼中にない訳ですから」

水島「なるほど」

あんどう「だから、是非ね、この東京財団の動きは凄く注目するべきだと思います」

水島「そうですねぇ」

あんどう「このシナリオに乗っかって消費税増税のストーリーが今、描かれつつありますから、出来るだけ色んな人が、これを食い止めるっていうことをやっていく必要があると思います。やっぱり、もうねぇ、気づいている人が言っていかないと、これは、止まらないと思うんですよ」

田中「あんどうさんが、そういった財政再建って、世界の現実の流れとは、もう無縁に追及していると言って、ちょっと思い出したんですけどね、新海誠さんって居るじゃないですか。彼が昔、世界の現実の動きとは別個に男女の小さい世界、まぁ、カタカナの『セカイ系』というアニメを作ったんですよね。正に、それと同じですよね。君と僕だけのカタカナの『セカイ』で動いているのが、今の財務省の、そういった息のかかった人達のセカイで、我々の考えている漢字の『世界』とは全く違ったセカイ系ですよね」

あんどう「そうそう、そうそう」

田中「生きている世界線が違う訳ですよ。だから彼らは彼らなりの理屈が通っちゃっているので、これは、もう、やっぱり『ザイム真理教』って、よく言ったと思いますよ。本当にそうだと思いますよね」

水島「そうですね」

田中「だから、それを解呪するにはどうしたらいいかっていうのは、恐らく信仰が強いので、しかも自分達の昇進とかね、社会的なこの評価にも連動しちゃっていますから」

室伏「マスコミも使うでしょ」

田中「えぇ」

あんどう「そうなんですよ」

田中「マスコミが、もてはやしちゃうからね」

あんどう「そう」

田中「これは、もう、やめられない、とまらないですよ」

あんどう「そうですよ」

田中「だから革命を起こす訳にもいかないので、やはり、誰かが政治のトップになって、ここらへんを、まぁ、少なくとも第一線から遠ざけた方が、お前ら、もういいから、ほんと、カタカナの世界で生きてくれっていうね、活躍の場ぐらい与えて封殺するしかないですよね」

水島「そうですね」

あんどう「これで恐ろしいのは、『「政治の無駄」の削減については、具体的な全体像及び規模を国民と共有した上で、増税策とセットで進めるべき』で、増税策と歳出削減をセットで進める上で『歳出削減のみで終わらせないように留意する』って書いてあるんですよ」

水島「うん、うん」

あんどう「もう徹底的に、歳出削減だけじゃなくて増税も併せてやれという凄い事をパッケージで提案して、これを国民に呑ませろっていうことを考えているんですよね。凄いですよ、これ」

田中「まぁ、政治の無駄ってありますけどねぇ。それが一番、無駄ですよ。その財団がねぇ」

あんどう「そうそう、そう。そうなんですよ」

一同「(笑)」

田中「ほんとに無駄だな。無駄の財団だと思いますねぇ」

水島「だから、前に言ったように、よくキャッシュディスペンサーって言われているっていうね」

あんどう「はい」

水島「これは、我々も、はっきり言うようになっているけども、東京財団、日本財団、これはＧＨＱが創った財団ですよ。だから、そういう意味では、戦後の日本の様々な経済や政治の在り方をアドバイスしてきたっていう、軍事もそうですけどね。だから、いい意味でも悪い意味でも、東京財団とか日本財団というものは、やっぱり注目した方がいいと思っているのはね、珍しくずぅ〜っともってきた訳ですよ。シンクタンクってやっていくのは、お金、出してくれる人は誰だっていうね、中々大変なんだけども、戸締り用心、火の用心のＧＨＱのスパイをやっていた笹川さんがね、やっぱり、そういう意味での、ちゃんとご褒美を戴いて、こういうことをやって来たっていうね」

室伏「いいですか」

水島「うん」

室伏「日本財団はそうなんですけど、東京財団政策研究所は金を取っていますけど、創ったのは竹中平蔵です」

水島「あぁ、じゃあ、やっぱり全く同じだね」

室伏「そうです。だから、もっと性質が悪いです」

水島「性質、悪いねぇ」

室伏「もっと性質が悪い」

水島「そうかぁ。（失笑）」

室伏「それで、そこから構想日本が出来て、その構想日本のトップは加藤秀樹さんという、まぁ、大蔵ＯＢですけど完全に大蔵別動隊。あの連中が『事業仕訳』やったじゃないですか。だから、とにかく、それが、いつの間にか事業仕訳がどうなったかって言うと、行政事業レビューっていう形で行革の中に完全に組み込まれて、それをベースにして何でもかんでも進めましょうということになっていると」

水島「それで、このアイデアが出るんだ…」

室伏「えぇ。この人達っていうのは、要は、政府の委員をやるとか税調の委員をやるとかっていう形で、恩典で、ご褒美を貰って、だから彼らの主張っていうのは、もう読んだり聞いたりしたら判りますけど、もう机上の空論とか前提から間違っているんです。あり得ない話ばかりじゃないですか。だけど、仮にそれに反論したとしても、もう議論が噛み合わないですよ。正に、ほんと『セカイ系』って言うかね」

水島「さっきの別の、違う世界なんだね」

室伏「何処かの惑星に住んでいた方々なので、でも、それを、その通りがいいということで、しかも最悪なのは、大学院が僕の母校なので、三田祭の研究発表って面白いので必ず見に行くんですけど、ほんとに今、可哀想です。去年もあったので久しぶりだったので見に行ったんですけど、今、学生達は可哀想。だって学生達、特に経済とかを教えている先生方っていうのは…」

あんどう「三田祭って慶応のっていうことですよね」

室伏「そうです。三田祭って、あそこの先生方っていうのは、正に東京財団の研究員をやっている人とかが居るので、もう完全にメチャクチャな論理で、学生達は演習やっている訳ですよ」

あんどう「う～ん…」

室伏「だから学生達が大学の３年生、４年生が完全に嘘を叩き込まれて、それ以外は、認めないという形で社会に出て行くので、だから、尚更、このアンケートって、どうやってとったんだよっていうね、その問題もあるんですけれども、そういう子達だけにアンケートを取れば、それは先生のおっしゃる通りですって言うに決まっている訳じゃないですか」

水島「それはね、ああいうのは学者の先生の言う事を聞かないと出世も何も全く無いからね」

室伏「はい、はい」

水島「もう本当に気に入られないとね、まぁ、そこはあるっていうことですが、ただ、本当に、今、言ったようにね、私は最近、今度の訪米で明らかになったように、全て政治も軍事も、アメリカのバイデン政権の、まぁ、ネオコンですよ、はっきり言うと、ネオコンの言う通りになっていて、軍事、政治、経済、金融、そして、この間、我々がパンデミック反対の集会、１万人集まった集会の、そういう保健衛生の分野まで、薬やこっちの注射や色んなもの迄、全部、ＷＨＯが命令する形の中で日本が引き受けていく。

これは凄い話で、ここまで進んだかっていうね。だから、さっき田村さんが言ったように、もう雁字搦めの構造になっちゃっている。ただ、その中で何が出来るかって言うと、やっぱり、まず食べ物とか命の問題は、どうしたってイデオロギーに関係なく、生きなきゃいけないし、子供を守らなきゃいけないとかあるから、そこからでないとねぇ、もうエリートというか、今迄のエリートとは違うね、やっぱり国民がやるしかないっていうねぇ、実際は、そこまで来ているんじゃないかっていうね。

だから、今、構造的に言うと、これまでの戦後構造を全部、守る状態になっている。それから、私が一番、やるのは、ＣＳＩＳとかね、アメリカのシンクタンクが、どういう形で望んでいるか。この間、訪米した上川さんとか、あの連中はＣＳＩＳのアミテージだなんだっていう、あの辺のトップ達と打ち合わせしている。

それから、岸田さんがブラックロックとかね、ああいう国際金融資本の親玉と何度も会っているって、これを見ると、本当に軍事、政治、経済、金融、保健衛生、健康の問題、食糧、エネルギー、これらが全部、支配下にね、岸田内閣のお陰で、今迄も勿論、属国的な立場ではあったけれども、もう完璧にいったんじゃないかと。

そうすると向こうの立場に立って戴きたいんだけど、アメリカにとってと言うか、バイデン政権、まぁ、トランプに替われば別かも分かりませんけど、日本は今、一番、いい状態なんですかね」

あんどう「ん？」

水島「アメリカにとって、バイデン政権にとってね、今の日本の経済や政治、政治は勿論、言うこと聞いていますからあれだけど、どういうことをアメリカは日本に望んでいるんだろうという感じがするんですけど、経済として、経済的なパートナーなのか植民地なのか分かりませんけど、この辺、室伏さんはどう思いますか」

室伏「僕はね、もう今のバイデン政権云々どうこうっていうことよりも、もうちょっと長期的なスパンで見た時に、要は東アジアに豚さんをね、ずぅっと一生懸命、いい餌与えて育てて来た訳ですよ、保護を与えて、檻の中で何にも困らないように。もう丸々太った本当にいい豚になったから、じゃあ、これから、さぁ食べにかかろうって」

水島「そうだよね」

室伏「僕は、それだけにしか見えないですね」

水島「本当にそういう感じだね」

室伏「そこに政治家は抵抗しなきゃいけないのに、俺は保身の為には、それに乗っておいた

方が、ちゃんとアメリカ様に豚さんを献上した方が、俺、得だよね、って言って向こうに協力したという、一番が岸田文雄」

水島「まぁ、そうだよね」

室伏「その前に、前さばきっていうか、何もよく判らずに同じようなことをやったのが菅義偉じゃないですか。だから結局、今の流れで、直近で言えば、菅から、まぁ、安倍さんも、そういうところがありましたけど、少なくとも丁々発止っていうか抵抗するところは抵抗したと思います」

水島「うん」

室伏「もう抵抗も何もしないで、もう好きにしてって言い始めたのが菅義偉じゃないですか。それで自分の保身の為というので、更に好きにして、をやっているのが岸田ですから、そういう意味で言うと、本当はアメリカを利用して、豚さんが太ったんだけど、もう、ずぅっと虎視眈々と檻から逃げるタイミングを狙うっていうことをやれていたのが、かつての政治家だと思うんですけど、今はこの檻に居た方がいいよね、もう豚さんが食べられてもいいや、俺は大丈夫だからって」

水島「うん」

室伏「だから、その意味でも、何だか、もうね、これを言うと元も子もないんですけども、完全に終わっているんですね」

田中「あぁ、そうですね。だから、そういうのを最近、金融政策の在り方をね、日銀、古い方の批判していた人でもね、株が上がっていて儲かったから、あぁ、いいやみたいなね。だから自分さえ良ければいいやみたいな風潮が、そういった経済を論じる人達の中にも出て来る訳ですよ」

水島「うん」

田中「やっぱりね。でも、それは本当に視野狭隘で、株価っていうのは実体経済のミラーの部分があるから、やがて変調してきて、今現在、足元でも、かなり乱高下していますから、やがて駄目にはなるんですが、でも、そんなことを言ってもね、豚さんは食べられて、俺達だけ大丈夫だと思っている人には通用しないんですよね。お前も、やがて食べられるんだよと言っても通用しないんですよね。

そこが、所謂、カタカナの『セカイ系』の人達の話ですよ。彼らだって馬鹿なことをやっている訳ですよ。財政再建って、現実の経済と無縁にね。正にイデオロギー全開でやっている訳ですけれども、それで、あんた方ね、どんなメリットがあるのかって言うと、まぁ、正直言って大したものは無いと思うんですよ」

水島「だからね、実現したからって言って何がね」

田中「えぇ」

水島「じゃあ、その財政再建が再建っていうのか、まぁ、いいわ、とにかくプライマリーバランスがオッケーになったとして何が起きるのって」

田中「そうですよねぇ」

水島「何も無いでしょ」

田中「まぁ、何も無いっていうか、彼らの中でも多分、競争があると思いますよ。同じことを言っている人が、いっぱい居て、その中で、もう既に、ある程度のランクに居る人達が、あぁ、こいつ、もっと使いようがあると。のりしろがあると。それで何人か競わせて、政府の委員だとか、まぁ、中には日銀の委員とかにするとか、そういった風に抜き取って行くんでしょうけども、それって極一部ですよね。多くの人にとっては、そこに関与しても恐らく何のメリットも無いですよ。簡単に言うと使い捨てですよ」

水島「そうだよねぇ。だから、これは前に何度も何度も言っていることだけど、安倍さんがご存命中に一次内閣と二次内閣の間で、ちょっと個人的に話した時、私は竹中さんのことを、安倍さん、竹中は拙いでしょうって言ったら、いや、水島さん、あれは学者じゃないんですよ、政治ですよと。だから切れないって言ったんだよね」

田中「へぇ～」

水島「うん。だから、もう、それは、はっきり何度も言っている事だし、直接、私もお話ししている時で、もう一つ付け加えると、世耕も駄目でしょうって言ったんです、当時ね（笑）。そうしたら、いやぁ、世耕君は、これから学んで段々良くなっていくと思うので、見守ってやって下さいと言われた。その二つは凄く印象に残っていてね、今、田中さんが言ったような流れで言うと、つまり財務省とか、そういう関係者達が財政緊縮をやって、プライマリーバランスを完全にしたとしても、一体、それで日本をどうしたいんだっていうのが全く解らない。だから、私が感じるのは日本っていうのが無いんじゃないかと」

室伏「無いと思います」

水島「ねぇ」

室伏「全く無いです」

水島「日本の文化や伝統も含めてね、それから庶民や国民を幸せに、経済的も豊かにするとかね、こういう経世済民みたいな感覚が無いんじゃないのっていうね」

田中「無いですよね。だって２０２５年のプライマリーバランス黒字化って未だに下げていない」

水島「そうです」

田中「俺の記憶によれば、それって来年ですよね」

あんどう「それ、やる気ですからねぇ（失笑）」

一同「（失笑）」

田中「もう、どうしようもない。例えば、消費税を２０％にしますとかぐらいじゃないと、来年、実現しませんから」

水島「うん」

田中「正に、それだけとってもキチガイ来たぁ～のねぇ、いい話ですよね。どう考えても、おかしいですよね」

水島「いや、だから、おかしい」

室伏「実は今、対ＧＤＰ比で言うと、３％ぐらいになっているので、ヨーロッパの方の基準で言うと、ＥＵの基準で言うと、既に財政健全化しているんですね」

水島「おぉ～」

室伏「でも、それを認めちゃうと、嫌だから、とにかくプライマリーバランス。だからプライマリーバランス黒字化は未だ緩い目標だとかね」

あんどう「そう」

室伏「もう、あの人達、めちゃくちゃです」

あんどう「金利を入れようっていうね」

室伏「そうそう。勿論、金利、入れます。利払いとか出てきますから」

田中「それで金利の付く世界だから、高めの金利をいれられる訳ですね」

あんどう「そうです、そうです」

田中「１０％ぐらい（笑）」

あんどう「より厳しい基準にしているから、また進む訳ですよ」

室伏「そうです、そうです」

水島「国のローンだね、別の国みたいだけど、例えば、本当に我々の場合は富国強兵とかね、色々国家目標っていうか、こうなればいいと。民や平和の、いや、左翼的でもいいですよ、平和の実現とかいうことがあるけど、日本の国のイメージが本当に無い。日本っていうことが本当に、その中に枠組みとしての日本はあるけれども、本来、共同体としての日本が全く無いし、時間的な過去と未来の繋ぐ意識も無い」

室伏「もしね、そういう国民意識とか国家意識があるんだったら、絶対に国民に対して自己責任を求めるとかゾンビ企業は潰れろとか、そんなものは言えないですよ」

水島「言えないね」

室伏「あと地域はね、もう人が少ないんだから、復興は効率的にやるとかね、口が裂けても、そんなことは言えないですよ」

水島「あの能登半島は本当に驚いたね」

一同「うん」

室伏「えぇ」

水島「内心、思ったとしても、そこまで言うかっていうねぇ」

田中「だから他人の立場に自分を置くっていうね」

水島「うん」

田中「共感の意識っていうものが全く欠けていると。それが、例えば、官僚だったら、まぁ、ある程度あれですけれど、政治家の一部にもね、そういった人達が居る訳で、あまり政治の方でそういった発言が出て来たら、やっぱり猛烈に批判するのが当たり前ですけど、何か、みんなねぇ、スルーしちゃって」

水島「そうですねぇ」

田中「どうなのかなぁって気はしますよね」

室伏「やはり、そこにあるのは、また、これもね、特に若者達ですけど、俺達が不幸なのは、年寄りがいい暮らしをしているからだとかね。あいつらは給付を沢山貰っていて、若者は使えないオジサン達がいい給料を貰っているのに僕達は少ないと。あの人達が居なくなれば、僕達はいいっていう、何か世代間対立を勝手に仕組まれて、仕組んでいる連中っていうのは、ナントカモンとかね、なんとかゆきとか、ああいう変な人達ばかりですよ。無責任に言うだけの人達ね。

でも、それによって得しているのは誰ですかって言ったら、若者でもなければ、当然、高齢者でもなければ、対立を煽って自分達が得をすると言ったら、金融屋さんとか一部の新自由主義利権の人達だけですよね」

水島「例を挙げて、ジョークっていうのを送ってくれた人が居たんだけど、ウクライナからスイスに逃げて来た人は、医療費、住宅費、それからプラス２０００ユーロって言うけど、２２０万ぐらいなのかなぁ、分かんないけどね。もうちょっと多いのかも分かんない。で、それを貰えるんですって。だから、スイスの中にも貧しい人が居て、ジョークでは、お前、とにかく一回、ウクライナへ行って国籍を取れと。ウクライナで国籍を取ったら、こっちへ戻って来いと」

一同「（笑）」

水島「そうしたら、今以上の最高の生活になるよっていうね。そういうのがあったんだけど、本当に今、クルドの人達も難民申請すれば１日１５００円貰える。４万５千円ですか。それにプラス住宅系の手当て貰うと９万円を貰える。それに解体業とかバイトをやっていますから、物凄いお金がいい訳で、楽しているから、どんどん、１９００人居たのが、もう５千人近く川口にはクルドの人達が居る。クルドの人が悪いとかいうことじゃないけども、やっぱり、この間、中学生のレイプ事件がね、クルド人によるものが起きているっていうのがね、やっぱり、そういう意味で、国は迎えることをしても全部、自治体に任せちゃっているんですよ。

管理とかやっていないんでね。本当に国家のね、そういうものが及んでいない形で、こういうものが今、どんどん進んでいる。田村さんね、これを直すには、政治家を変えるしかないということですかね、役人と」

田村「まぁ、全てと言っちゃあ、でも、結局、何もならないんですけど」

水島「はい」

田村「やっぱり、中心は政治のはずですけど」

水島「そうですねぇ」

田村「だけど政治を決めるのは有権者ですからね」

水島「うん」

田村「有権者の言論は、まぁ、メディアがありますから、非常にそこは厳しいところですけどね、民間のサイドで言えば、やはりメディアですよね。政治サイドっていうのは、やはり、この官僚の統率も出来る訳ですから、だから重大なる責任がある。だから、政治サイドの中心は、やはり内閣であり政府機構ですからね。う～ん」

水島「はい。田村さんは、この本を書いて、もうね、ずっと流れを書いて来たんだけど…」

田村「うん。やっぱり、私は物凄く考えるのは、今の円安問題も日銀のあれも財務省のあれもね、結局、あの戦後とは何だったのかということに帰結するということですよね」

水島「うん」

田村「だから結局、戦後と言ってもね、結局、プラザ合意以降、もう変質しちゃったんです。つまり何が起きたかって言うとね、アメリカは完全に、ずっと赤字でしょ」

水島「うん」

田村「国際集計、経常収支が」

水島「そうですよね。ずぅっと、そうですよね」

田村「僕は、ずっとグラフを作ったらねぇ、最近ではアメリカの経常収支の赤字が円換算で言うと１００兆円を超えていますよ。その内、日本からどのぐらい金が行くかというと大体６割から７割、いっています」

水島「あぁ～」

田村「だけど、２０２１年ぐらいまではね、大体６０兆・６０兆でバランスしていますよ」

水島「あぁ～…」

田村「つまりアメリカは日本の金が無ければね、ドルの基軸体制は維持できない。ということは、アメリカは金融市場が維持できないっていうことです。従いましてね、まぁ、はっきり言えば、日本から絶えずアメリカに金が行かなきゃいけないということです。つまり日本はデフレでなきゃいけないんです」

水島「そうかぁ…ということは、今の財政緊縮」

田村「うん」

水島「それから、あれは合っているんだ、利上げも」

田村「全部、そうですよ。だから、植田氏は大規模緩和撤廃とか言っているんだけど、それで利上げすると。円安で大変だとか、だから金利を動かすかもしれないみたいな話までやるんだけど、要するに彼のやれることは、要するに０．２５％ぐらいの小刻みな利上げをやるでしょう。そしたら投機が余計に喜んじゃいます」

水島「そうでしょうねぇ」

田村「だって、何故かと言うと、投機筋は全部、金利のスワップとか、デリバティブを使ってね、金利が動くのを見越した上で円売りをやるんですよ」

水島「う～ん。それは、そうでしょうね」

田村「だから、全部、それが分かっているのに、みすみす敵の罠に嵌ってしまうんですね、うん」

水島「例えば、今、おっしゃるように、ちょこちょこ、ちょこちょこ、やっていくっていう、ショックを与えないみたいな言い方でやっていくんですけど…」

田村「うん」

水島「極端とは言わないけど、大胆に、どんと金利を上げちゃうと、もう日本の経済は冷え込み、何て言うの…」

田村「だから、結果は同じです」

水島「同じですか」

田村「だから、経済がめちゃくちゃになりますから」

水島「めちゃくちゃですよねぇ」

田村「うん」

水島「何をやったって、彼らが上げる限り駄目ですよね」

田村「だから、私は、もう円安を本気で止めたいって言うなら、要するに外に投資するなと」

水島「うん」

田村「持って来いと」

水島「おぉ」

田村「だから、こういう正論にすりゃあいいんですよ」

水島「全くそうですよ」

田村「それは政治家が口で言えばいい」

水島「うん」

田村「これだけで、もう効きますからね」

水島「う～ん」

田村「うん」

水島「いや…」

田村「だから、それは何故、言わないかって言うとね、言えないかっていうと、まず、その発想がそこまで行かないっていうことだとしたら、要するに日本を、いかに守るかという」

水島「うん」

田村「ここの意識が無いってことですね」

水島「うん。だから本当に軍事費も４３兆円をね、５年間でやろうなんて言っても、日本の中の現実問題として、どういうものが効率的であるか。今、殆どドローンじゃないですか。そういうものも全然、取り入れていないですよね。それから電磁波兵器っていうのは、誠に日本の専守防衛に合っている、向こうから来るのを歪めるだけの兵器ですからね。強力なものを造れば１６台ぐらいで日本の全土を守れるみたいです。そういうことがあっても、金を出せないので出さないんですよね。結局、おっしゃったように、つまんないトマホークを買うということで、貢ぐ訳です（苦笑）」

田村「ということは、要するに軍事でも抑止力が大事なんですよね」

水島「はい」

田村「経済でも抑止力が無きゃいけない」

水島「今、抑止力、無いですからね」

田村「無い。だから全然、そういうことを考えないので」

水島「うん。今の時点では、もう遅いですから、例えば、やっぱり、もう一回、異次元金融緩和に戻すわとやったら、どうなりますか。やっぱり、あまり変わんないですか」

田中「いや、結構なショックになるんじゃないですか」

水島「ねぇ」

田中「ただ実現性はゼロですけどねぇ（失笑）」

水島「いや、それはそうだよね」

田中「えぇ。だから唯一の可能性としては、戦争が起こっちゃって、市場に凄い圧力がかかった時に、また戻すっていうことはありますが、先程、言ったようにタイミングは大きくずれてくると思うんですよね」

水島「そうだね」

田中「今迄、せっかく苦労して金融緩和をやめたのに、また、これで戻すっていうことはね、まぁ、植田さんを始め腐りきったエリート意識からすると、彼らのプライドは傷つきまくりますから」

水島「そうだねぇ」

田中「もうタイミングは絶対に遅れますね」

水島「いつも遅れていますからね」

田中「とにかく中東で戦争みたいな状況が起こらないことを本当に祈っていますよ。はっきり言って、今、起こったら本当に拙い」

田村「いや、起きたら日銀は恐らく利上げするでしょう」

水島「えっ」

田村「利上げしますよ」

水島「利上げする…」

田村「だって円安が進む。エネルギーが高騰する（苦笑）」

水島「あぁ、そうですね。そういうことだね。そうそう益々…」

田中「室伏さんが書いた円安の部分っていうのは、実際、そんなに大きくないんですよねぇ。だって戦争が起こったら石油自体が来ない訳だから、つまりコストプッシュが異常に膨れ上がる。この輸出国での価格が膨れ上がっちゃうんですよねぇ。だけれども、日銀としては金利を上げて、為替の円安部分を叩き潰すっていうのが、彼らのプライドにも整合的だし、まぁね、何となくマスコミもね、こっちですか、この円安が大きく作用しているっていうことを、ずぅっと喧伝していますから、マスコミも応援するでしょうね」

田村「まぁ、一貫して円安は悪い、悪い円安だ、こればかりで、特に日経新聞が一番、盛んにやっていましたけどね」

田中「そうですね。だから、戦争状態になれば、まさに田村さんのおっしゃったような政策を執るのが、彼らの腐りきった根性から言っても、一番、整合的で、マスコミの従来の報道から言っても整合的で、やっていることはカタカナのセカイ系ですよ」

田村「だから円安っていうのは実体経済に於いて、やはり設備投資を刺激しているんですよね。これはデータからも非常にハッキリしていますよね。だからね、円安で設備投資を維持するということの目的意識の中で、それで政策を考えればいい訳ですよ。だから設備投資をもっと維持しよう。じゃあ、国内に回帰させよう、だったら税制だってトービン税をやればいい訳ですね。

つまり還流する分に関しては、法人税をまけますよとかね。そういうことを、さっとやればいいんですよね。或いは、そういう制度を作っておけばいいんです。そうしたら抑止力になりますよね」

水島「う～ん、それが全く出来ていないですねぇ」

田村「そうそう、そう。企業にとってみれば、やはり円の相場が、そんなに大きく振れて、明日、どうなるか分らんっていうのが一番、困っている訳ですよ、はっきり言って」

水島「そうですねぇ」

田村「だから別に１ドル１８０円でも２００円でも安定していればいい訳ですからねぇ」

水島「かつては固定していたんだよね。うん」

田村「だから、やはり出来る限り大きく変動しないという風に持って行くしか無いですね。だから円安で、もっと大きく振れていくっていう予想が立つなら、じゃあ、その予想を消すようにすればいいということですよね」

田中「だから、田村さんのおっしゃったようにね、今、海外子会社で資産運用をして、そこで儲かった部分を海外で運用していますから」

水島「そうだよね」

田中「日本にお金が戻ってこないっていうのを、トービン税って言いましたけどね、海外の子会社の資産運用に重く課税して、国内に来る分には減税っていうね。そういったメリハリをつけた税制で、逆に国内に投資を呼び込んでいくと。お金を戻していくという政策を執れということですね」

水島「その通りですね」

田村「だから、これに一番、反対するのはアメリカですよ」

水島「うん。そりゃそうですよね」

田村「アメリカは日本に依存しているんだから」

田中「あぁ。全くね」

田村「うん。だからねぇ、対米従属関係っていうのは非常に効いているんですよね。だから、思考までが停止しちゃっているんです」

水島「そうなんですねぇ。典型的なのは、さっきも言いましたけど、今度、マイクロソフトが日本に４千億を投資して進出する。アマゾン、グーグル、だから、みんな、メリットあるから来る訳でしょ。その分だけ我々の出すお金が、さっき言ったように見当はずれの所にお金が出て行く。ＴＳＭＣとかね。これは元お役人さんだから、ちょっと聞きたいんだけど」

室伏「はい（笑）」

水島「こういうものを彼らに企画させるって言うか、今、もう完全に無理なのかな」

室伏「いや、結局、元々色んなものを企画したりとか、原案を作ったりするのっていうのは、役所って基本的に積み上げなので係員とか課長補佐が主導してやっていくんですけど、もう、正直、今の課長補佐以下ってレベルがダダ下がりですよ」

水島「そうだよねぇ」

室伏「だから、僕が最近、言っているのは、霞が関の県庁化って言っているんですね。別に県庁が悪いって言っているんじゃないんですけど、霞が関の役人が昔、きたような、まぁ、優秀、まぁ、ちょっと今の東大のトップとかも駄目ですけど、昔で言えば、そういう連中が来なくなって試験も楽にしちゃったから、申し訳ないんですけど、昔だったらノンキャリでは来たかもしれないけど、キャリア以外には絶対、受からなかった連中が受かって入って来ているんですね」

水島「うん」

室伏「だから、もう、そういう連中って本来であれば、昔であれば、地元の県庁に就職する訳ですよ（苦笑）」

水島「県庁で、うんうん」

室伏「そう。だから完全に霞が関は県庁化しているので、もう国家観をもって、ちゃんと企画するなんていうのはどんどん出来なくなるので、どうなるかって言うと、外のコンサル会社に投げるとか、あとはそういう新自由主義者がロビイングしてきたのを凄い口八丁手八丁

に言われちゃうとか、あとは勉強会と称して何かきらびやかな会場に呼んで、まぁ、会長だかなんだか持ち上げられて、しかも見た目がきれいな広報担当のお姉ちゃんとか、くっついちゃうと勘違いして舞い上がっちゃって、だから、それを、ふぅっと入れて、どんどん上にあがって、よく解らない政策が政策化されたりとか法制化されたり、今、もう法制化も酷いですけど、法制化されるとか完全に悪循環になっているんですね。

これは、僕、本を持って来ていないですけど、僕が解説を書いたマリアナ・マッツカートの『国家の逆襲』の中で、イギリスでも、やっぱり、そういう現象が各国で現象が起きているという風なことにはなっているんですけど、日本は今、本当に酷いですね」

水島「うん」

室伏「はい。だから正直、もう一回、２０年前に戻すのは難しいですけど、でも国家公務員の処遇を改善したり、試験を難しくしたりとかっていうことをしていかないと、これから先、更に下がりますね」

田村「まぁ、やっぱり国家戦略を考えるのはねぇ、本来、軍部ですよ」

水島「うん」

田村「日本の戦前の陸軍って、マイナスメージを戦後の人が抱くんですけれども、実は一番、国家戦略を考えていたのは陸軍なんですね」

水島「そうでしたねぇ」

田村「要するに日本は芯になる機能が無くなっている訳ですね。だから、じゃあ、どうするかっていうレベルで議論すればいい訳ですよね」

田中「その室伏さんがマッツカート、彼女の本を訳しているのを今、初めて知って驚いているんですけど」

室伏「あぁ、解訳ですけどね」

田中「まぁ、そこも何か発想的には同じですよね」

室伏「はい」

田中「所謂、国家戦略を起業家的な発想で立てていくということなんですが…」

水島「うん」

田中「それは一つ面白い試みだとは思いますよね。ただ、彼女のやっていることって新自由主義的な発想と結構、密接な部分もあるので、そこが、ちょっと気になりますけどね。結局、まぁ、何て言いますかね、どういう発想で経営をやっていくかっていうことですけど、やっぱり国民の利益を最大化するようにやっていくんだけど、それが上手くいけばいいんですけどね、何か国民が、民間の特定の経営者だけの利益になってしまうとか、だから特定の既得権団体に入れ替わってしまう危険性っていうのも、彼女の発想の中には、あ〜…」

室伏「正に、今、おっしゃった問題を指摘しているんですね。だから、ちゃんと国家の役割を取り戻しましょう。だから、まぁ、この邦題は、敢えて『国家の逆襲』っていう言い方をしていますけど、企業家としての国家、国家は企業家っていうことで、要するに国家がイノ

ベーションを財政支出であるとか、それから目標を立てるミッション・エコノミーみたいな形で引っ張っているんですよと。

だから、実は、そのイノベーションっていうのは、何かベンチャーが始めたとかＶＣが何とかとか、あとガレージで何か天才的な起業家が創ったとかじゃなくって、国家が引っ張っているんです。だから、僕は、この番組でも、よく言いますけど、このアップルのアイフォンの中に含まれているコア技術で、スティーブ・ジョブズが開発したものは一つもありません。これは全部、軍事技術の塊ですからね。それをやったのはアメリカ政府ですね。はい」

水島「うん」

田中「まぁ、それはそうですね。だから彼女以外にも、例えば立場は、ちょっと違いますけどハジュン・チャン（ha-Joon Chang）も、やっぱり同じように国家が市場を創ったという発想ですよね。やっぱり、それは正しいと思いますよ。歴史的に見てもね。日本の市場っていうのは真っ新で民間が自律的に立ち上げた訳じゃなくて、やっぱ国家主導でつくられた訳で、そこから社会だとか、民間の経済活動が生まれて来た訳で、やはり国家戦略っていうものが、しっかりしないと、やはり民間の経済活動っていうのは新しいものが中々生まれ難いと。

だけれども今の岸田政権のね、じゃあ、それで同じようなことをやっているじゃないかと、新しい産業政策っていうもので半導体産業とか、そういったものを熊本に誘致するとかやっているじゃないかとか。でも、何かちょっと違うような気がしますよね」

水島「だからねぇ、さっきスティーブ・ジョブズの話をしたけどね、技術は本当に集積して纏めただけじゃないですか。あれで言えばね」

室伏「組み合わせるのはうまかったんですけど、だから、例えばＣＥＥってあるじゃないですか。あれだって核戦争の時の軍事のバーチャル秘書サービスっていうのを開発したやつですし、だって、もうナビゲーション・システムってありますよね。このカーナビだってアメリカ空軍が未だに巨額の投資をして維持、向上させていますからね」

水島「いや、だからね、今言ったように、そこの問題で言うと、じゃあスティーブ・ジョブズは何だったんだっていうと、私から言うと、国家でいうと、所謂、ネーション的なもの、哲学とまで言っていいかどうか分らんけど、こういう人とのコミュニケーションとか人間と情報との関係とかいうのを哲学してやった人間のような気がしているんですよ。

今言ったように、具体的な問題は全部、言う通りで軍事技術の集積で彼が発明したものは一つも無い。でも、それをどうやって纏めてイメージとして、国家で言うと、それをネーション的なもの、ステート的なものとは違うもので、我々が足りないのは今、岸田さんのことを言ってくれたけど、あの男は本当に全くネーションの感覚が無いんだよ」

あんどう「なるほど」

水島「英語で言うとね。つまり国家の中のシステムとか法律とか、これだけじゃないものが実は国家の中にある。ステートとか、もっと言えばカントリーとかネーションの、そういう時間とか歴史とか伝統とかというものがある中で、だから、私は、スティーブ・ジョブズが受けたっていうかな、アップルっていうか、こういうのを受けたのは、やっぱり、そういう哲学じゃないけど、そういう纏める、こんなものだというね、これは、もう打ち出せたことが、優れたところじゃなかったのかとか…」

室伏「まぁ、スティーブ・ジョブズにネーションとか、そういうのがあったかって言うと、ちょっとね、それはあれですけど、まぁ、要するに上手く組み合わせて新しい商品を作っていったっていうだけですし、あのう…」

水島「いや、ただねぇ、それを纏めるものは…」

室伏「始めは、例えばデザイン力はそうです。デザインはそう。でもデザイン自体は、そのネーションとか、そういうものとは別物だと思いますけどね。やはりデザイナーとしては、こういう格好いいデザインをつくれるのは、やっぱりそれは凄いと思いますけどね」

水島「いや、ただねぇ、私は、スティーブ・ジョブズの言った本とかを、一応、２冊ぐらい読んでみたら…」

室伏「えぇ」

水島「禅とか何とかって色々なこと解ったようなことを言っているけども…」

室伏「彼は禅ですね、はい」

水島「やはり、私が思ったのは、あの中にそういう要素というか、人間の要素っていうかね、便利な機械って、ウォークマンっていうのはそれだけだったんだけども、そこから飛躍していくものについてはね、ちょっと我々の中で今、戦後のＳＯＮＹとか、そういうものが段々駄目になっていった時、やっぱり、さっき言っていた国家の意識が、日本というのが失われてきた。それは結構、大きなところがあるんじゃないかっていう抽象的な言い方になるかも分からないけど、実際は、そういうところが気になるんですけどね」

田中「だから国家戦略無くして経済の民間経済の順調な発展は無いという視点が、まず必要だと」

水島「うん、そう」

田中「あと、もう一個は、先程、海外で民間の企業が財テクしている、そのお金を国内に引き戻す為のトービン税、税制の改定っていうのが必要だと。更に三番目は大胆な金融化をもう一回、やらせると。少なくとも何か危機があった時には伸縮自在にやっていくことが重要だと」

水島「あぁ、やってもらいたいねぇ」

田中「そういったことの３点と、あとは消費減税」

水島「消費税減税ね」

田中「これはやった方が絶対に効くと思いますよね」

水島「それは本当にそうだよね」

田中「今日は、日航機の方は、ちょっとコメントを控えますが、こういった４点が、お話を聞いて、僕は未来に繋がるような要素かなって思いましたね」

水島「そうですね。はい。どうですか、あんどうさん、最後に」

あんどう「はい、やっぱり消費税ですね。これだけ円安になっていますから、消費税ってい

うのは輸出企業に対する補助金っていう側面がありますけれども、円安になっていれば、そんなものは要らないので、今こそ消費税廃止は一番、いいタイミングだと思います」

水島「これは前に聞いたことですが、何故、経団連は消費税を上げろ、上げろと言っているかというと、やっている仕事は、大体７割が大きな企業は輸出だと。輸出になると、全部、還付されるんですって」

あんどう「消費税は還付されますね」

水島「だから上がれば上がる程、大儲けするっていうね」

あんどう「うん」

水島「それは大きいでしょう。我々は全部、払っているけど、彼らの７割は輸出だっていうことで戻って来るっていうね、７割分の売り上げの１０％ですか、これは嬉しいですよね」

あんどう「うん、大きいですよね」

水島「もう、これを聞いた時には本当に腹が立ったんだけどね（笑）」

あんどう「（苦笑）」

水島「はい。では、田村さん、最後に」

田村「まぁ、やっぱり、だから、現実に、例えば消費税って言うけど、子育てを本当にしたい、もっと子作りさせようとか言うんなら、やはり勤労者家庭で一番、お腹すいた子供達を食べさせなきゃいけない。だから、少なくとも食料品はゼロにすべきですよね」

水島「うん」

田村「直ちにそれはやるべきでしょうね」

水島「うんうん、うん。そうですね」

田村「こうすると、途端に子育て支援とか少子化対策とかの説得力を持ってくるんですよね」

水島「いや、本当にそうですよ」

田村「態々説得力の無いことを言ってね（笑）それで、子育て支援とか少子化対策だって」

水島「開いてみたら、増税ですからねぇ」

一同「（苦笑）」

田村「こういうねぇ、何か本当に狂ったことばかり続けるなんてねぇ（笑）」

水島「ふざけるなっていうねぇ（笑）」

田村「何故、こんな簡単な理屈が解らないんだろう、って言うか、全く真逆のことを、何故、してしまうのかね」

水島「はい」

田村「周りはねぇ、東大卒であろうが、本人は早稲田卒なんだろうけど（笑）でも僕は学校

って関係ないなぁと思うんだよね」

水島「本当にそうですよ」

田村「本当に、これは人間そのものの知性ね、それから国家意識、こういったものが問われている訳ですよね」

水島「そうですね」

田村「うん」

水島「はい」

田村「だから、私はトービン税を申し上げたんですけど、これは全部、関連していなきゃいけない訳ですね。１本の戦略の筋で繋がっていなきゃいけないんですね」

水島「うん」

田村「バラバラにやっちゃ駄目ですよ。ここのところが、安倍さんの場合は、まぁ、私も色々、非難した部分が大いにありましたけど、少なくとも脱デフレとか強い日本を取り戻すっていう根幹のところはあったんですよね」

水島「まぁ、そういう目標はありましたね」

田村「だから岸田さんは何も無い訳だから（失笑）ぼやっと何か新しい資本主義とかいっている（笑）」

一同「（笑）」

田村「これが、もう最悪ですね」

水島「はい。分かりました。じゃあ、田中さん、最後に一言」

田中「いや、あのう…」

水島「さっき纏めを言ってくれけど、さっきのあれで…」

田中「まぁ、さっき自分なりに皆さんの意見も集約して４点ぐらい具体的な政策で、今日、特にトービン税は、なるほど、そういう風に使えばいいんだなということが判ったので、先程の国家戦略無くして経済戦略無しということが大きい問題だなと」

水島「そうですね」

田中「今の岸田さんは、ともかく総理大臣になって、ヒャッハーって言って喜んでいると」

一同「（笑）」

田中「ずぅっと、それで、この数年間、いっていると。それを、できるだけ延ばしてやりたいというのが彼の個人的な欲望でしょうけど、我々は非常に迷惑だということを是非、自民党の中で言ってくれる議員を一人でも二人でも三人でも居て欲しいと思うんですが」

水島「うん。そうですね」

田中「何故、居ないと」

水島「本当に居ないんだよね」

田中「恐るべきことですよねぇ」

水島「そうです」

田中「みんな、総裁選が早く来ればいいなぁって、他人事のように待っていますよねぇ。馬鹿かと思いますよね、はっきり言って」

水島「馬鹿で臆病だっていうね。腰が抜けているっていうね」

田中「だから党に睨まれると、お金を絶たれるとか」

水島「そうです」

田中「やっぱりポジションが無くなるとか」

水島「今度、選挙だしね」

田中「えぇ」

水島「はい、有難うございます。では、最後に室伏さん」

室伏「はい、まぁ、ちょっと話が外れるっていうか、中々政治家に期待できるところは無いかもしれないとか、確かに今だとね、じゃあ、もう一回、大規模な金融緩和って言うと難しいっていうのは、おっしゃる通りですけど、ちょっと、一つの過去の例を最後に申し上げたいと思います」

水島「はい」

室伏「橋本龍太郎総理ですね。橋本政権の時に消費税を上げたんですけど、もう一つ、財政構造改革という法律を作って、もうド緊縮を進めようとしたと。ところが消費税とド緊縮を始めて、翌年になったら目に見えて経済指標は落ちたと」

水島「うん」

室伏「その時、橋本総理は何をやったかと言うと、これは拙いと。少なくとも財政構造改革は失敗だと。これは拙いからやめようと言って、夏の参院選は負けちゃうので、最終的に、それをやるのは次の総理、小渕総理ですけど、財政構造改革法を止めたんですね。凍結した訳ですね」

水島「そうですね」

室伏「更に小渕総理は積極財政に転じたんですよね。この時に財務省、まぁ、当時の大蔵省は散々財政危機ガー、財政危機ガーって言ったんですけど、煩い、やるんだと言って、まぁ、残念ながら御病気で小渕総理は亡くなってしまうんですけども、続けたということで、要は政治家が決断すれば出来るはずだということですね」

水島「うん」

室伏「だから望み薄という意見も聞こえるかもしれないんですが、是非、政治家には決断をして下さいと。その為にも野党から、まぁ、どうしようもないんですけど、もうちょっと、

勉強をして正しい経済を学んで下さいと」

水島「そうだねぇ」

室伏「それがあるからこそ政治家は決断できる訳ですから、是非、そういう方向にもって行くことが出来ればなという風に思います」

水島「はい。有難うございました。今日は、途中まで、森永さんがお出でになって、本当に、大変、腎臓癌の重い４期という容体の中でご出演戴きました。本当に皆さんに伝えたいことがあったと思います。そういう中で、この本も今、売れていると言われていますけど、今日の皆さんも含めて本当に命懸けで日本の事を考えている。政治家の諸君も役人の諸君も、居住まいを正して日本の為に働いて貰いたいと思います。いずれにしろ大変なことは、これから起こって来る中で経済を見つめていかなきゃいけないと思います。今日は以上です。有難うございました」

一同「（礼）」